

呉組組《官官的補品》訳注

上田 望

自分は田舎の出身である。閻魔大王³が私を立派な⁴家の子に生まれ変わらせてくれたおかげで、この世に生をうけるやすぐに人から「ぼっちゃま」と呼ばれる身分である⁵。毎日ぶらぶらしていても⁶美味しい食事にはありつけるし、生きていくためにすべきことはみな他人が私のために甲斐甲斐しくやってくれるから、自分一人こんな野蛮で面白味のないところから抜け出し文明人⁷の群に入って生活を楽しんでいる。今のところ、私は非常にうまい具合にやっている。白い顔、白い手、文明人の装い、文明人の言葉遣い⁸、ダンスホールや映画館に出入りするのにも何のためらいもない⁹。

私は幼い頃に故郷を離れた。数えてみるともう十年ちよつとになる。多くの田畑や山が故郷にあるけれども、それらを動かすことはままならない。母親が健在だが、彼女は年寄りなので「骨を他郷へもっていくことはできない、あの世で孤魂野鬼¹⁰になってしまうから」と言っただけで田舎に残ることを希望し、二百年前から続く先祖の土地旧宅¹¹を離れず、私に年に一度は戻ってきて顔を見せるようにと無理を言う。私は母のつらい心中を理解し、毎年帰省してしばらくの間田舎に滞在していた¹²。今年は故郷の方では匪賊¹³が騒いでいたが、危険を覚悟で帰省することにし、おじ¹⁴がよこした四人の自警団の団員¹⁵に守られなんとか無事に家にたどり着いた。

私は幼いときから痩せて病弱なお役人の資質をそなえていた¹⁶。大きくなってからは、頭がくらくらし冷や汗が出る文明病を患っている。去年の夏上海で、陸柔姫¹⁷という女性とドライブに出かけたとき、車が事故を起こし¹⁸、出血がひどくて輸血をしたが、体は元通りにはならず¹⁹、前よりもっと痩せ細ってしまった。母性本能が少しも衰えていない母親は、「あなたのような体だったら補精食品をもう少し摂らないと！」とくどくど言う。しかし私も馬鹿ではない。もちろん補精食品がいいことはわかっている。上海²⁰だったら補精食品を摂るのは簡単なことである。パイク牛乳²¹やカボル乳白魚肝油²²の類は味も悪くないし体にもいい。しかし田舎に戻ると全く困る。郷里の人間はお粥やご飯の他に食べる物があることを知らないのだから、どうして肝油が田舎にあるのか？ 牛乳に至っては、郷里の牛は、郷里の人間と同じで首を曲げ頭を垂れ重たい犁を付けながら畑を走り回るだけであり、上海の牛が上海の文明人たちのように温度・空気がきちんと調節された部屋で安穏と乳を「つくっている」²³のとは大違いである！²⁴

母親は言った²⁵。「ねえおまえ、乳母を雇ってあげるから人の母乳をちよつと飲んでみてはどうだえ？²⁶」

私は笑った。立つと五尺ある人間が、女性の胸元に寄り添って²⁷乳を飲む。これはもちろんできないことではないが²⁸、郷里の女たちは上海の女性とは違う。彼女たちはみな²⁹干からびて黄色くしわくちゃな³⁰顔で、全身から汗のすえた臭いを放っている。男に抱きしめられ口づけされるために³¹肌を白く整え³²、香水やパリから輸入された白粉³³をつけたりすることなどありえないのだ³⁴！

私に母に向かって眉をしかめ³⁵、首を横に振った。

「どうしておまえ嫌なんだい？」

「そりゃだって恥ずかしいもの」

「何が恥ずかしいものですか」母親は笑って、私の考え違いを正した³⁶。

「馬鹿な子だね。おまえに子どものときみたいに口でお乳を吸わせ³⁷ようというのじゃない、乳母にお碗に母乳を搾って³⁸もらっておまえに飲ませようというのだよ！」

私はこんなうまいやり方があるとは思っていなかったのだから、びっくりしてたずねた。

「牛乳みたいに搾ったのを飲むの？」

「当たり前よ。これは牛乳より十倍もいいのよ³⁹！」

「それじゃちよつと試してみようかな⁴⁰」

母親は本当に喜び、ただちに乳母を探しているという話⁴¹を他の者に伝えると、次の

日⁴²には早速、鉄芭蕉というあだ名をもつ⁴³女の雇い人が三十歳前後の乳母を連れてきた。鉄芭蕉は前を歩き、頭の大きな赤ん坊⁴⁴を抱きかかえている。乳母はその後ろにいた。この乳母は典型的な田舎女の特徴をそなえていた。体つきは、上半身ががっしり、下半身がほっそりとしていて⁴⁵、枯れ干からびた色の髪⁴⁶は乱れっぱなしでまるで雀の巣のよう。小さな足は足の甲が高く盛り上がっており⁴⁷、「ハサミのように先の尖った」靴の中に斜めにつっこまれていた。輝きのない目、低い鼻⁴⁸、赤黒い唇、左右の口角には乾いて灰色のつばがこびりついている⁴⁹。黄色くてかさかさした顔⁵⁰、汗の酸っぱい臭い⁵¹ももちろん持ち合わせていた。彼女は青い布で作られたぼろぼろの大きな単衣⁵²を身にまとい、大きな二つの乳房は胸元で見え隠れするようにゆれ、彼女がよろよろと進む⁵³歩調とリズムを合わせている⁵⁴。

母親が腰掛けるようにと言うと、彼女はきまり悪そうに腰を下ろした。使用人の女の子⁵⁵がお茶を注ごうとするとあわてて立ち上がって両手⁵⁶で茶碗を受け取り、口をあけほほえみを浮かべながら低い声で、「もったいなくて罰が当たります⁵⁷、おねえさん。」と言った。

「遠慮しなくていいのよ。」母親は言った。「うちの若旦那⁵⁸は—— きっと鉄芭蕉がもう話したことと思うけれど—— 育つのがはやくて、小さいときにお乳も足りなかったものだから、身体がとても虚弱なの⁵⁹。それで誰か適当な人を探して、お乳を搾ってもらって飲ませようと考えたのだよ。私の見るところ、あんたは身体もしっかりしているようだし、礼儀もわきまえている。気に入ったわ。ただ、あんたのお乳の質がよいかどうかわからないのだけれど？⁶⁰」

鉄芭蕉は両手で赤ん坊の脇の下を支えちょっと高い高いをしてから赤ん坊をおろし⁶¹、それから母親の方へ歩み寄って、男のようなだみ声で話し出した⁶²。

「奥様。この女⁶³の醜い様子はご覧にならないで下さいまし。この乳は本当に赤ちゃんを肥え太らせる⁶⁴んですよ⁶⁵。ほら、この赤ん坊⁶⁶だけご覧になって下さい。生後数ヶ月で李逵みたいに大きくなって⁶⁷！」

赤ん坊は肉まんのような拳をぎゅっと握って、笑うと⁶⁸まだ歯の生えていない赤い歯茎⁶⁹が見える口をその拳で塞いだ。乳母がからかって彼の顔をちょっとつつく⁷⁰と、肥えて厚みのあるとび色の肉がふるえた。下顎や腕にも分厚い肉がついており、幾重にもたがをはめているかのようであった⁷¹。

母親はたずねた。「何ヶ月の赤ちゃんだい？」

乳母は赤ん坊にほほえみかけていたが、母親の問いかけを耳にすると口をちょっとすぼめ⁷²、低い声でのろのろと⁷³答えた。

「七ヶ月です。九月⁷⁴になったら満一歳です」

「赤ちゃんを見る限りでは、お乳が悪いということはないようだね」

「あんた、ひもボタンをはずして奥様にちょっとお見せするんだよ」鉄芭蕉は人の歓心を買うためにまめまめしい。

そのとき私は椅子に横たわって紙巻き煙草をくゆらせていた。

乳母は恥ずかしそうにどんよりした目を大きく見開き⁷⁵、私のほうを見た。どうもここでひもボタンをはずすのは私がいるから恥ずかしいらしい。

「何をもたもたしてるんだい⁷⁶！」鉄芭蕉は言った。

「うちの旦那様はあんたの瓢箪みたいな×おっぱい⁷⁷なんかご覧になったこともないんだよ。もう三十⁷⁸にもなろうって人間が、赤ん坊だってぼこぼこ二人も生んでるんだろ⁷⁹、一体何を恥ずかしがるっていうんだい！」

乳母は顔を赤らめ、きまり悪そうに⁸⁰母親の方を見たが、もうそのとき母親は彼女の傍らまで来ていた⁸¹。彼女はいたしかたなく、恥ずかしそうに⁸²ひもボタンをはずしていった⁸³。

その一對の乳房といたら、乳首がぴんと立ち、本当に瓜棚から垂れ下がっている瓢箪のように大きかった。乳首の四周を褐色の斑点がびっしりと取り巻き、青い血管⁸⁴が地図上の河川の流れのように交錯しながら胸元まで広がって⁸⁵いた⁸⁶。母親は商品を品定めする買い物客のように注意深く乳房を観察した。そして手を伸ばしてちょっと揉んでみ

ると、豆乳のように白い乳がほとばしった⁸⁷。鉄芭蕉はそれを少し指につけ口に運び、舌で音を立てて味見をした⁸⁸。

「甘くて美味しい。道理でこの餓鬼ん子が豚みたいに大きく育った⁸⁹わけだわ。奥様、どうぞ味見してくださいまし」

「色を見ればいいものであることがわかるから味見する必要はないわ。鉄芭蕉、今からあの人とちょっと値段⁹⁰の話をしておくれ。」

「あんたが自分の考えでお決め⁹¹。正直に自分で申し上げるんだよ⁹²」鉄芭蕉は乳母に申しわたした⁹³。

「私も自分の考えでは決められません。うちの母は言っていました、“奥様にお任せするように⁹⁴。奥様は私たちに損をさせる⁹⁵ようなことはなさらないから”って」

「今言ったこと、なかなか気に入りましたよ⁹⁶」母親はゆっくりと⁹⁷腰を下ろした。

「普通住み込みで坊やの世話をして⁹⁸もらうなら、一ヶ月で銀貨三枚⁹⁹なのだけれど、今度の場合はあんたに毎日通ってきてもらって二回乳を出してもらえばいいだけだから、あんたのところの赤ちゃんも今までと同じように乳を飲む。——あんたたちのところが貧乏で苦しいことは私もわかっているから、ひと月銀貨一枚半ほど給金を出そうじゃないか¹⁰⁰」

「一日二回来て、一ヶ月で銀貨一枚半¹⁰¹を出すですって？ この取引はほんとにうれしいね¹⁰²。もしうちの短命だった亭主が死んでなかったら、私だってよそこに働きになんか出ないで、お乳をつくっては売って金に換えてりゃ、一生楽に暮らしていけたのにね」¹⁰³鉄芭蕉ががなり立てたので母親も笑った。乳母は恥ずかしそうに乾いてひび割れた口の両端を舌でちょっとなめ回すと、笑みを浮かべながら¹⁰⁴言った。

「奥様は本当にお慈悲深い方だし、お天道様のご加護がある旦那様は将来は一品官になれるお方ですから¹⁰⁵、わたしらにもっと馬蹄銀のへりをかじらせて下さるでしょう¹⁰⁶。——奥様、あなた様はご存じないでしょうが¹⁰⁷、今のご時世は、生きていくのも簡単なことじゃございません。うちは口も多いし、舅は体が不自由で¹⁰⁸しかも年がいつています。うちのぼうやのおとつつあんも——」

「早く乳を搾るのが筋ってもんじゃないかい¹⁰⁹。しかめっ面¹¹⁰するのは乳を搾ってからにおしよ¹¹¹！」

鉄芭蕉は、蓋つきの茶碗を持ってきて、カエルのような声¹¹²で叫んだ。

乳母は顔を赤らめながら茶碗を受け取ると、またはじめからさっきかけたひもボタンをはずし、右手で左の乳房を引き出し¹¹³、乳首を押しながら少し揉んで、茶碗めがけて搾りはじめると、ビュービューと音をたて白い乳が一筋一筋ほとばしり出た。

私は離れたところから見ていたが、とても面白かった。この女¹¹⁴は本当に牛みたいに愚かだが、しかしさすがに牛よりは賢い¹¹⁵。牛は乳をつくるが、人がかわって搾り出し金に換えなければならず、自分で桶に首を伸ばして出来合いの食べ物を嚙んでいるだけである。この乳母は、いやこの牛は、自分の手で搾り、売って金に換え、自分を養うことができるだけでなく、さらに家族までちゃんと面倒みている。私は思った、「人間というものはやはり牛よりも賢いのだ」と！

「聞くのを忘れていたけれど、あなたのところの家族はだれがいるの¹¹⁶？」母親は哀れむようにたずねた。

「申し上げたら、奥様はきっと覚えておいでですよ」鉄芭蕉が横合いから口を挟んで答えた。「この女の舅というのはあの死に損ない¹¹⁷の、半身不随の陳ですよ。夫というのは去年、旦那様が上海で事故を起こされたときに病院で血を採って旦那様に輸血したあのハゲの陳ですよ」

「まあ、それじゃ以前西村の楊樹墩¹¹⁸にあるうちの二十畝の田畑を借りていたが、一昨年小作契約をうち切った¹¹⁹あの小作農かい？」

「まさにその破落戸でございますよ！」

半身不随の陳とハゲであれば、私もこの二人はよく覚えていた。半身不随の陳はうちの小作農のなかでも最もたちが悪かった¹²⁰。他の家はみな規約通り上等な米¹²¹を納める

のに、やつの家だけは大きさが不揃いのかごで質の悪い米を持ってくる¹²²。しかも小作米は三十石¹²³納めなければならないのに、毎年数十斤不足する。催促し契約うち切りをちらつかせようものなら、やつはすぐに足を引きずりカタツムリのように¹²⁴這ってやってくる。そして泣きっ面で母親とおじにうまいことを言って寛大な処置を請いねがうのである。こんなやつでも口は非常に達者で¹²⁵、やれ雨が少ないの、イナゴが大量に発生した¹²⁶だの、楊樹墩は川から遠くて水が引きにくく、高台の田畑¹²⁷なので水車で水を汲もうとしても汲みにくい¹²⁸などとぬかす。そうでなければ世の中¹²⁹が悪いせいにして、田にかかる税、戸籍税、民兵税¹³⁰などあまりに繁雑で自分には払いきれないと文句を言い、さらに、自分は足が悪いのに息子は一人しかおらず人手不足で¹³¹、かといって人を雇うことも手間賃が高すぎてできないのだと言う¹³²。そして、慈悲の心をもって彼ら一家に玄米の粥を恵んでくれば大きな陰徳を積むことになる母親に哀願するのだ。

母親は慈悲深い人なので、いつもやつにちょっと泣きつかれるとすぐに考えを変えてしまふ。こんな状況が一昨年まで続いていたが、一昨年は苗を植える時期と作物が生育する大切な時期に雨が降らなかった¹³³ため、やつは半分しか小作米を納められなかった。おじは激怒し、法を守らず小作料を納めるのを拒んだかど¹³⁴で、やつを県の役所に送り牢につなごうとした。おじのそのときの話はすべて理にかなったもの¹³⁵だった。おじは言った。「みんな同じお天道様を頭の上にいただき、みな同じ時世に生きとるんだ。他のところはみなちゃんと雨が降り、田畑に水が行き渡っているのに、どうしておまえの耕している田畑だけ水がないんだ？　よその田畑にはイナゴがいないのに、おまえの耕している田畑だけイナゴがいるんだ？　よその小作農はみな民兵税、戸籍税、田にかかる税を納め、みな臨時雇いを田畑に入れているのに、どうして連中はみな手間賃が払えて、毎年おまえ一人だけが恨み言を言いにやってくるんだ？　小作の契約書にはちゃんと“虫害や旱害があっても毎年必ず質のよい米をいくらいくら納めます、もし小作米を納めるのを拒み、滞納するようなことがあれば役所に送られ処罰されても文句はいいません云々”と書いてあるし、おまえの拇印も捺されているぞ。おまえも法を知っているなら、法を守ってもう少しまじめにやらんか」　半身不随の陳もおじにこのようにきっぱりと言われては¹³⁶、やつがどんなに狡猾であっても返す言葉がなく、目を大きく見開き¹³⁷涙を流すばかりであった。やつは母親の前で県の役所に訴状を出さないよう哀れみを請うことしかできなかった。母親は本当に人のいい老夫人なので、彼のそんな様子を見て、また子孫のために功德を施そうと思い、うちでは何石かの米が未納になったところで大したことはなく、今までずっと彼を許してきたのだから、今後はよそに小作に出すことにし、それで彼らが私たちに朝顔の蔓やカボチャの蔓みたいにとわりつくことがなくなればそれで十分ではないかと言って、おじにこれ以上責任を追及させなかった¹³⁸。

半身不随の陳の息子のハゲは、去年落ちぶれて上海を放浪¹³⁹していたのを、私が救ってやった¹⁴⁰のだった。さっき鉄芭蕉が言ったのはそのことである。

去年の夏、上海で私は陸柔姫を新たに好きになった¹⁴¹。この娘は蟾宮ダンスホール¹⁴²の踊り子で、象牙のように白い肉の持ち主であった¹⁴³。きらきら輝く黒い瞳には情愛が満ち満ちていた。英語の歌が唱え、口語文の手紙¹⁴⁴を書くこともできた。そのなまめかしくほっそりしたスタイル¹⁴⁵は、世界中探しても比肩する者が見あたらないほどだった。

ある日の晩、蟾宮ダンスホールでダンスパーティー¹⁴⁶が開かれた。にわかに興がのったため¹⁴⁷私と陸柔姫は続けてピース¹⁴⁸を十数回、パーティーがお開きになるまで踊ったが、なお興は尽きなかった。音楽がないので蓄音機をかけて陸柔姫にタンゴをコーチさせ、空が明るくなるまで騒ぎ続けた。その日はまさに火のように熱い日¹⁴⁹で、空には一縷の風もなかった。工場の煙突から吐き出される濃煙は全く揺れ動かず、黒い霧となってふわふわと市全体を覆い、胸に綿花がびっしり詰まっているような息苦しさを人々に感じさせた。扇風機も全く用をなさなかった。陸柔姫は熱さに耐えかね、自動車でドライブ¹⁵⁰に行きたがった。自動車に乗り、運転手にスピードを上げさせると、風がピューピューと全身に吹きつけてきた。陸柔姫が私の胸元に顔を近づけると、馥郁たる髪の毛の香りが私の頬のあたりに漂った。私は酔ったような惚けたような気持ちで、流行文学者の言葉を

まねて¹⁵¹彼女に言った。「君と一緒に死にたい¹⁵²。今日、この車が、このところ新聞でよく目にするみたいに電柱にぶつかった¹⁵³としても、あるいは川に落ちてても、ぼくは君をこんな風に抱きしめ、笑みを浮かべながら訳もわからないうちにすぐに死んでいこう。そうになったらどんなにいいことか！¹⁵⁴」この冗談が不吉な予言になるとは思ってもしなかった¹⁵⁵。運転手が酒を飲んでいたのか、疲れていたのか知らないが¹⁵⁶、江湾のカーブで自動車ごと道ばたの溝にひっくり返ったのだった。

この事故¹⁵⁷は非常に悲惨だった。愛くるしい陸柔姫は投げ出されて内臓をやられ、口や鼻から血を流し、病院に到着する前に死んだ。私は砕けたガラスの破片で後頭部に傷を負い、三十分以上卒倒していたが、カンフル剤を注射されてようやく蘇生した。ただあの幸運な運転手は、怪我が最も軽く、ただ右手を負傷しただけであった。この事故で、治療費や陸柔姫の家族への補償金などを含めて全部で一万元近くかかり¹⁵⁸、私はおじや母から相当な怨みと叱責を受けた¹⁵⁹。

私は失血がひどく¹⁶⁰、また悲しみも深く¹⁶¹、肉体、精神ともに大きな打撃を受け、半月ほど入院していたが少しも恢復しなかった¹⁶²。故郷からお金¹⁶³を持ってきたおじは、私の病状がここまで悪いのをみてあわてて医者と相談し、最も即効性のある適切な方法で私を治療するよう要求した。その外国人の医者は輸血の注射¹⁶⁴を行うべきだと主張していた。私はそれがどんなものなのか知らなかったのも、医者の言う通りにはしたくなかった。外国人医師は穏やかで親しみやすい人¹⁶⁵で、租界なまりの上海語を話した¹⁶⁶。

「輸血注射はたいへんよいです¹⁶⁷、たいへんよいです。ちっとも痛くありません。せいぜい蚊に食われたくらいです」

「一体どんな薬を私に注射するんです？」

「他人の血をおまえの体に入れるんだよ」おじはさすがに私よりよくわかっていた。

「誰の血を？　もしかして買えるんですか？」

「この若旦那は、本当に純真¹⁶⁸でよい方だ！」その外国人医師は私の肩を軽く叩いて言った。「中国に貧しい人はたくさんいますよ。彼らは銅銭を稼ぐ腕もありません。しかし、おなかを彼らを容赦せず、同じようにご飯を食べなきゃいけない。血を売らなければ腹を空かせることになる。わかりますか？　体が良くなったとき、門のところに行ってご覧なさい。両側の長椅子¹⁶⁹に一日中すわっている薄汚い破落戸¹⁷⁰どもは、みな血を売ろうという連中ですよ」私はうれしくなって笑い声を上げた。この世界は本当に面白いよい世界だ。お金があればなんでも買えるのだ¹⁷¹。

「しかし上海というところは」と、外国人医師は高い鼻の上の皮に皺を寄せて¹⁷²、首を振りながら言葉を継いだ。「汚いものだらけです¹⁷³。十人の破落戸の血のうち、九人分は不衛生です。毒があり、汚染されている。全くだめです。全くだめです¹⁷⁴」

おじは頭のよい老練な人物であり、この件は適当に進めてよいことではないと言った。上海という町には至る所に花柳病の広告が貼ってあり、至る所に娼婦¹⁷⁵が立っている。血を売するような人間はみな金がなくて嫁をとることができない連中であり、およそ低俗なことでやらないことがあるか？　そんな毒のある血が一旦自分の血管に注入されたら、それを取り出すすべはない。おじは話の途中で急に、昨日汽車から降りたときに北駅でたまたま同郷人にあつたが、そいつの血ならきっと比較的信頼がおける筈だと言い出した¹⁷⁶。私が誰のことかたずねると、それが息子のハゲのことだったのである。

「あいつがどうして上海へ世間を見に¹⁷⁷できたんだらう？」

「それよ！　あいつは私を見かけるなり五円借りようとしたんだ。あいつは——いい気味だ¹⁷⁸。去年、家ではやつのところから小作の田を取り上げたので、故郷では食べていけなくなり、なんでもある布売りの行商人から、上海には工場がたくさんあり、給料も多く、仕事もきつくないと聞き欲が出て¹⁷⁹、わけのわからぬままその商人と一緒に上海へ潜り込んだ¹⁸⁰らしい。その布売り行商人は本当にやつに浦東¹⁸¹の紡績工場の力仕事¹⁸²を紹介し、毎日、三角の日当を貰っていたらしいが、あの馬鹿野郎¹⁸³も全くつきがなく、五ヶ月働いたらその工場は閉鎖になったそうだ。——なんでも日本の工場と競争して、赤字があまりに大きくなって倒産したんだ¹⁸⁴と言っていたが、やつの出鱈目を誰が信じるものかよ¹⁸⁵。——操業停止¹⁸⁶になってからその布売りも行方がわからなく

なり、上海には一人の知り合いもおらず、故郷に戻りたくても戻れない。ところがこいつは全く悪知恵がよく働くやつで、それから毎日北駅にはりついて行き来する同郷の知り合いを探しているんだよ」

「やつにお金をあげましたか？ もしあげたのなら今頃は上海を離れていますよ¹⁸⁷」

「おまえってやつは全く世の中のことがわかつたらんな¹⁸⁸。よその人間がやつを上海に来させたんだ、どうして私が理由もなくやつに五円あげるんだ？ —— やつの言っていることがほんとにかうそくらいわかつとるわい！¹⁸⁹」

私は安心できず、急いで彼を探しに行くよう催促した。おじは医者に、自分のところで信頼できる知り合いを見つけることができたが、その人間から採血しても大丈夫かどうかたずねた。

「たいへんけっこうです。たいへんけっこうです。私どもの病院ではこの二、三日よい血が入ってきませんでした。あなたがその人を連れてきたら、検査させてください。使えるかどうかみてみます」

おじは出かけてからしばらくして、本当にハゲの陳を連れて戻ってきた。このハゲだが、私は一目見てすぐにわかった。三十過ぎで、頭の上にコブナグサみたいな細い髪の毛が薄くのっかっている¹⁹⁰。両眼は上につり上がっている¹⁹¹。汚い木綿の短い上衣¹⁹²とズボンを身に着け、胸元ははだけている。裸足に前のところが破れ穴のあいている陳嘉庚のゴム靴¹⁹³を履いていた。昔よりも少しやつれてはいたが、隆々たる筋肉は相変わらずで水牛のようであった。やつはやって来て、私に声をかける¹⁹⁴と、二つのつり上がった目で部屋の調度品をじろじろ見ていた¹⁹⁵。

医者はやつが私の病室に長くとどまる¹⁹⁶のを許さず、すぐに血液検査に行かせた。医者は戻ってきて上機嫌に何度も「イエス・キリスト」と叫び、おじの眼力が優れていることを称賛した。なんでもかやつの血はたいへん素晴らしく¹⁹⁷、かつちょうど私の輸血に適しており、これは神のご加護、なんだそうである。また、私の体はあまりに弱っているので、たくさん輸血するとあるいは耐えきれないかもしれないので、三クオート¹⁹⁸もあれば十分だとも言っていた。

病院では血液を買うとき、通常の価格は一ポンド十円だが、まれにその血をどうしても必要としていることを売り手に気付かれてしまったとき、その人間は自分の血を奇貨¹⁹⁹として、足元を見て値段をつり上げてくる²⁰⁰ことがよくある。このハゲはやつの父親と同じように狡猾で、おじがわざわざ北駅まで自分を探しに来たことや、そして血液を検査したあとで医者がとても素晴らしいと言っていたことから、この機会を逃さずたかろうとし、三クオートの血で二十円をおじに要求してきた。

「おまえは全く人の好意を踏みにじるやつだ」おじはやつを罵って言った。「うちの旦那はおまえを哀れに思い、おまえが他郷で流浪しているのを心配して²⁰¹、特におまえをこの取引に推薦して下さったんだぞ。それをおまえは今、足元を見て高値をふっかける！

よし、ふっかけてみろ！ —— 計算違いをするんじゃないぞ²⁰²。門のところで待っている素寒貧がなにをしてるか見てみろ。血が買えないことはないんだ」

ハゲは天を仰いでため息をつき、もはやその狡猾さを発揮する余地のないことを感じとって、もう少しお金を都合してくれるよう口添えしてくれないかと私に懇願してきた。私は体が早く元通りになり、病院暮らしから解放されることだけ考えていて非常にいらいらしていたので、おじにやつが同郷人であるということに免じて²⁰³十五円払うよう頼んだ。

医者は血を採ると(薬品を入れた瓶の中に入れて保存し、冷めて凝固しないようにした)、その晩すぐ私に輸血をおこなった。これは本当に痛くなかった。ただ、十数分ほど経ってから、悪寒と発熱の症状が交互にあらわれはじめ²⁰⁴、まるでマラリア²⁰⁵に罹ったようであり、体の震えでスプリングベッドがぎしぎしと音をたてた。私は恐ろしくなってきた。

「私はだまされたんだ！」 私は声を震わせて叫んだ。「先生はしっかり検査しなかったんだ。ハゲの血にはきつと毒があったんだ！」

医者と看護婦は優しい声で穏やかに²⁰⁶私に²⁰⁷説明し、これは輸血後必ず出る症状で、じきよくなると言った。私はうとうとしながら²⁰⁸次の日まで眠ると、熱や寒気は退いていたが、全身だるくて精神的にもかなりまいっていた。

私は病院に三ヶ月入院し、心身ともに全快してから、おじに追い立てられるように故郷へ戻され209数ヶ月を過ごすことになったのだった210。

母親は気の毒そうにたずねた。「あなたの亭主はいまどこにいるの？」

「夫は去年上海から211戻ってきてから」乳母は右の乳房に換え、乳を搾り続けながら答えた。「——奥様、我々のようなところは、一人がぶらぶら遊んで無駄飯を食っていたらどうしてやっていけましょう。舅姑は夫と毎日口げんかばかり、半月ほど家でぶらぶらしていたかと思うと、今度はご近所の何人かと連れだって出かけていきました。なんでも省都へ行って軍隊に入るんだそうですが212、あの人には路銀ありません。出かけて七、八ヶ月になりますが、一体どこにいるのやら。」

「あんな種をつけることしかできない亭主213は死んだらせいせいするわ。全く何のために男の頭がのっかっているんだか214」鉄芭蕉はこうわめくと、赤ん坊の顔に何度かチュッチュッとキスをして215話しかけた。「あんたはあの情けないおとつつあん216を見習っちゃあいけないよ。あんたは将来、水牛みたいによく田を耕し、荷物を背負い217、お金を稼いでおかつつあんの面倒をみるんだよ」

乳母は一碗分の乳を搾り出し終わると、帰りが遅くなって姑にしかられるのを懼れ、すぐに赤ん坊を抱いて帰ろうとした218。母親は、スープ219を飲めば乳は自然によく出るようになるのだから、スープをたくさん飲むようにと繰り返し乳母に言い聞かせ、またうちは一人分くらい食い扶持が増えてもどうってことはないから、よかったら毎日うちに来て食事をするようにとも言った。乳母は笑みを浮かべ、多福多寿をいのる縁起のいい言葉220をいっぱい並べ立てお礼を言った。

鉄芭蕉は乳をおぼしてきて221私に飲ませた。この人間の乳は砂糖を入れていないのに非常に甘く222、またちっとも生臭くない。上海では一ポンドの牛乳が一ヶ月四円だが、たいていは豆乳をまぜており、この人乳には遠く及ばなかった。

私は毎日、乳を二碗飲んだ。乳母はうちが昼餉・夕餉をとるときに二回、欠かさず223やって来た。食事を済ますと乳を搾り、搾り終わるとまたいそいそと帰っていく。この乳は本当に上質で、一ヶ月ほど経つと私の食も大いに進むようになり、顔色もつやつやして赤みが出てきた。私はこの非文化的で面白味のない224ところに住みつけず、ここを出ていきたいとずっと思っていたが、県内のあちこちで土匪が暴れており225、大きな村226ではそれぞれ自警団を組織してはいたものの、これらの土匪を根絶やしにする227ことはとても不可能だった。そのため、母は私が危険を冒して出かけることを心配して許さず、この機会に家で何ヶ月か乳を飲み、少し休養した方がいいと言った。上海へ行けば、確かに人乳を飲むのは容易なことではない。

土匪と言え、この一ヶ月の風説にはもっと驚かされた。七星嶺228の土匪は先月、別の土匪と徒党を組み229、五百人以上が集結、銃や弾薬230も十分にそろっており、県の役所231に手紙を出して三万円を脅し取ろうとし、一週間以内に払うこと、びた一文でも欠けていたらだめで、払わないならただちに県城を攻撃し、村々を略奪すると言ってきたらしい232。この噂が伝わると、各村の自警団233はあわてて連絡を取りあって防備の手配をし、街道筋234の歩哨を増やし235、もし挙動不審の人間がいればただちに拘留し尋問をおこなった236。

おじは自警団の幹部だったので、終日自警団本部で仕事をしていた。私は家にも退屈なので、毎日そこへいっておしゃべりをしたり237、うわさ話を聞いていた。時々挙動不審な者を捉えて尋問するようなことがあったりするともっと面白くなってくる。自警団本部は我々の村の宗祠238に置かれていた。この二三日、自警団の幹部はみなここに集まって239四方山話をしていた。

「今年の前半に彗星が出たが、私にはすぐにこれが大乱の兆し240とわかったよ」ある自警団の幹部はこのように述べた。「——聞くとこでは、この土匪の一味と革命党とは繋がりがあらしい。うちのところ241でもはや手だてを講じて殲滅しておかないと、将来奴らに羽毛が生えそろったら242、そのときはわしらもひどい目を見ることに

なるぞ²⁴³！」

「これもうちらのところに悪い運がめぐってきた²⁴⁴のもしれんて。昔の人が言っているように、厄運の巡り合わせ、厄運の巡り合わせ、すべてのことに運命が定まっとるんだ²⁴⁵。遠くのところはさておき、このあたりの村々だけをとってみれば、日一日とだめになっていかない村がどこにある？ 十戸に九戸は困窮して糧食にも事欠き、十軒の商店のうち七、八軒は貸し倒れになって店を閉めておる。これが厄運でなかったらなんじゃ？」²⁴⁶一人の老人はひげをしごいてこう語ったが、話にはそれなりの道理があった²⁴⁷。

最も新奇²⁴⁸な意見は、よそで店をやっている²⁴⁹、つい最近避暑で帰省してきた遠縁の従兄²⁵⁰から出た。

「地方が一日一日とだめになっていくのは、決して運命とかじゃない²⁵¹。ぼくのところ、外国人が金をだまし取っていった所以ですよ²⁵²。ぼくらが子どもの頃²⁵³は、どこの家だって綿花を紡ぎ、地織りの布²⁵⁴を織っていましたよね？ 大豆油の灯りを使っていない家がどこにありました？ 喫煙についていえば、みんな火打ち石で紙縊²⁵⁵に火をつけてきざみ煙草²⁵⁶を吸っていて、マッチをすって大英ブランド²⁵⁷や小刀ブランドのシガレットを吸っている人なんか見たことなかったでしょう？ ものは自給自足だから、お金はめぐりめぐって我々の手に入る²⁵⁸。当時は飯にありつけないことを心配する人間なんか誰もいなかった。しかし、その後様子が変わってきた。綿花を紡ぎ、布を織っても売れなくなった。みんな舶来の機械織りの木綿布²⁵⁹で仕立てた着物や、厚地キャラコ²⁶⁰のズボン²⁶¹が安くて格好いいことを知ってますからね。大豆油の灯りが暗いのを嫌い、モービル・アジアの石油ランプ²⁶²を使うようになった。これらのものはみな中国人の金をだまし取ろうと外国人が知恵を絞って作り出したものですよ²⁶³。お金は一旦だまし取られると、取り戻すすべはない。これでもあなたは地方は貧しくないとおっしゃるんですか²⁶⁴？ まだそれでも運命とかなんとかおっしゃるんですか？ —— 最近になってもっと変わってきましたよ。農民も、一年中忙しく働いても²⁶⁵地主²⁶⁶に小作料の穀物を納め、諸々の税を払えばそれですっからかん。玄米の粥をすすろうたって容易なことじゃない。商売人だって持ちこたえようがない。地方の金持ちはみんな都会へ行ってしまう。みんな今、都会はにぎやかで楽しいところだと知ってますからね。連中は自動車に乗り、映画を見たがる。誰が我慢強く内陸の田舎に住みますか？ いい例がこの従弟だ。一日朝から晩まで上海、上海と、郷里に留まるのをいやがっているじゃないですか？」

「ぼくを引き合いに出さないでくださいよ」私は顔を赤らめ笑いながら言った。「あなた自身、都会に住むのが好きでしょ！」

「その通りだよ！²⁶⁷」従兄は続けた。「—— 金持ちは都会へ行って暮らす²⁶⁸ようになり、中流の家は日一日とだめになっていく²⁶⁹。残ったのは素寒貧だけ、腕一本脛一本のその日暮らしで何とか玄米粥にありついている有様、それでどうしてもものを買う金がありますか²⁷⁰？ 店を開けていても、一体誰と取引するんです？ やれやれ、田を耕す者は田を耕さなくなり、商いをする小僧や番頭²⁷¹は内陸の地方で商売相手を見つけられない—— 都会へ行くといっても、都会も同じこと、失業者は内陸の田舎よりももっと多い。この連中が強盗や土匪²⁷²にならずに何をやるって言うんですか？ これがどうして運命なんですか？」

「おまえさんが何と言おうと、運命というものは必ずある」老人は反駁して言った。

「そうでなけりゃ、どうして外国人が昔は中国人の金をだまし取れず、この頃になって急にやって来て²⁷³だますのかな？ これが運命でなくて何じゃ²⁷⁴？」

「昔、我が中国は鎖国していた²⁷⁵んですよ！」従兄は本当に議論に強い人だった。

「昔、外国人は中国に来ることを許されなかったんですが、戦争に負けてから²⁷⁶外国人が入り込んできて、中国は一日一日と貧しくなってきたんですよ²⁷⁷！」

「聞くとくところでは、外国も無茶苦茶だそうさ。何日か前の新聞でも言っとったじゃろ、アメリカには失業中の労働者が云百万、日本の失業者も云百万²⁷⁸、これは中国も外国もこの運命から逃れられぬということじゃ²⁷⁹！ —— 要するに、運命というものは必ずあるのじゃ！」

正直言って、私はこれらの議論にちっとも興味を感じなかった。私は街道を警備する自

警団がなるべくたくさん挙動不審な人物を捉えて来ることだけを期待していた。その尋問の様子²⁸⁰を見物するのは本当に面白かった。ある時など、五人の魔術を使う山東人を捉え、うち二人の女は屋根を飛びこえ塀にのぼれるということだった²⁸¹。何度も尋問をおこない、みな釈放を認めなかったが、彼らが土匪のスパイであるということも証明できず、その場で処刑することわけにはいかなくて²⁸²、最終的には県の役所へ送って裁断を仰ぐ²⁸³ことになった。

私たちをびっくりさせる一つの出来事が、ある日のお昼に起きる。私たちの村から三十里のところにある薛家鎮²⁸⁴の自警団員²⁸⁵が突然ハゲの陳を護送してきたのである。

団員は薛家陳自警団の手紙を持ってきた。文面によると、捕まえたこのハゲの陳は挙動不審なだけでなく、彼のズボンの腰の縫い目²⁸⁶から七星嶺の土匪が大鳳山の土匪に宛てた重大な手紙²⁸⁷（大意は、县城を攻撃する日時の取り決めであった）が見つかり、土匪の密使であることは疑いを容れない。いろいろと取り調べてこの男が我々の村の人間であることがわかったので、引き渡して我々の村の自警団に処分を任せるとのことであった。

この件は少なからず私を驚かせた。

ハゲの陳は前よりも羽振りがよさそう²⁸⁸であった。おじや私を見ると、必死に申し開きをして²⁸⁹、自分は土匪になんかなっていない、北河鎮²⁹⁰で小商い²⁹¹をしていたが、ずいぶん長いこと家に帰っていないので、帰って様子を見てみようとして、薛家鎮まで来て誤って逮捕されたのである。ズボンは宿屋で別の客とはき違えてしまった²⁹²のであり、腰の縫い目の手紙については何も知らないと言い張った。しかし薛家鎮の団員が言うには、この男の歩いていた道は私たちの村へ向かう道ではなく、大鳳山に通じる道であり、土匪の密使であったことは間違いなく、もう一度取り調べをおこなう必要はないとのことであった。

「おまえがろくなもんじゃないことはとうにわかっておったわ！」おじは罵った。「おまえがうちの田畑を耕していたときは、おまえとおまえの親父は何かというと悪賢く手管を弄し、また去年、上海ではおまえは人の弱みにつけ込んで高値をふっかけぼってくれたな。いいだろう、こんなくずをほったらかしにしといたんじゃ、わしらのところも乱れてたらんわい²⁹³！」

みんなも同意見で、こいつは両目がつり上がり²⁹⁴、満面に殺気が漲っており、凶悪犯²⁹⁵に違いない、殺してみんなの見せしめ²⁹⁶としなければ道義的にも通らないと言いつつ。

ことは驚くべき速さで進められた。ハゲはただちに後ろ手に縛られ、南村の河川敷²⁹⁷に牽かれていった。彼は顔を横にねじ曲げ、かっとうわたしたちのほうを睨めつけ、少しも怖じた様子はなく、それどころか自分を家に帰らせ父母や妻子にちょっとだけ会わせてくれと要求してきたが、もちろんこれは許されるところとはならなかった。

一罰百戒とするため、おじは銃殺刑ではなく、青龍刀²⁹⁸でばっさりとやることを主張した。自警団員の中から豚の屠殺解体をやっている者が選ばれて首切り役をつとめることになった。この顔中黒あばたの男は、たらふく高粱酒を飲んで、馬上で使う彎刀²⁹⁹をしっかりと握りハゲのあとについて行った。両眼は酔っぱらって赤くなり、恐ろしい面構えになっていた。しかし実際のところ、私にはハゲの面構えほど恐ろしくはなかった。ハゲの顔つきにはなぜかしら見る者を震えさせるものがあつた³⁰⁰。

河川敷は人でいっぱいだった³⁰¹。

ハゲが河川敷まで連れてこられた。おじは首切り役に脚でやつを蹴り倒すよう命じたが³⁰²、首切り役はうまく蹴れず³⁰³、あわてて手を使ってハゲを石ころの上に乱暴に押し倒した。ハゲは死んでも屈服しない³⁰⁴という態度で、わざと頭を大きな石にびったりとくっつけた³⁰⁵。引っ張り起こそうとしても起こせなかった³⁰⁶。首切り役はどうしようもなく、両手で刀の柄を握りしめながら³⁰⁷震えているだけで、ハゲに斬りつけることができなかった³⁰⁸。おじがそばに寄って行って彼を痛罵³⁰⁹したので、彼はようやく薪を割るかのように³¹⁰無茶苦茶に三太刀四太刀浴びせ、刀の刃を犬の牙みたいにぼろぼろにしまった³¹¹。

見ていたものはみなしんと静まり返り、ただ幾人かの悪たれ小僧³¹²が手をたたき騒いでいるだけであった。

ハゲは幾太刀かむやみやたらに斬りつけられて、鮮血があたり一面の石に飛び散り、身体は横たわったまま硬直して動かなくなった³¹³。首切り役も他の団員たちに支えられてその場を立ち去った³¹⁴。と、突然、死体がまたもがいて体を起こそうとし³¹⁵、両手をあげて、悪魔邪神のように鋭く甲高い叫びをあげた³¹⁶。みんなはびっくりして遠くへ逃げしようとし³¹⁷、わめく者もいれば躓く者もいた。おじも真っ青³¹⁸になりながら私を引っ張って走った。私たちは何度か躓きながらよろよろと逃げた³¹⁹が、何人かの肝っ玉の据わった農民は片づけに近寄って行った³²⁰。私は驚きのあまり頭がぼうっとして、おじの手をしっかりと掴んで放さなかった³²¹。

「みんなあいつが土匪だったなんて想像できるか³²²！」

「おそらく星宿の生まれ変わりだったんだろう、やつの気概からすると、好漢だったのかもかもしれん³²³」

道でみなこのことについていろいろと取り沙汰した³²⁴。おじは首切り役と団員たちのことを能なしだとひたすら罵っていたが、あとから揶揄するように言った³²⁵。

「あいつの血もいまや一文の値打ちもなくなったぞ。去年、一クオート五円で売っとくべきだったな³²⁶！」

私とおじが自警団の本部へ戻ると、私の乳母が髪を振り乱し、泣きわめいて本部の中から出てくるのが目に入った。

「うちの坊やのおとつあんは土匪じゃありません！　うちの坊やのおとつあんは土匪じゃありません！」　乳母は口をかつと開き、狂ったみたいに続けて大声で叫んだ³²⁷。

「とんでもない濡れ衣です。濡れ衣です³²⁸。自警団にはうちもお金を出してるのに、お金を出しているのにあなたがたはうちのひとを殺すなんて！　ひどい濡れ衣です！」

彼女は大声で叫びながらふらふらと河原の方へ走っていき、たくさんの女子供があとへついて見に行った³²⁹。人だかりの中から鉄芭蕉が飛び出し³³⁰、乳母に追いつくと泣きわめいている彼女をぐいっとつかんで引き留め、蛙のような聞き苦しい低い声色で罵って言った。

「このあま、本当にとち狂っちまったのかい³³¹。あんたの宿六は一寸刻みの刑³³²にあって当然なんだ。あんな風に殺されてもまだ運がいいほう³³³なんだよ！　戻ってうちの旦那様に乳も搾って差し上げず、五通神³³⁴にでも出くわしたみたいに何をめめめしているんだい！　全くあんたは……³³⁵」

1932. 3. 28

【訳注】

本訳注は、1998 年度前期に中国語学中国文学コースの外国人教師、王岳川北京大学教授と上田が担当した中国文学特殊講義の教材「官官的補品」に注釈を施し、日本語に訳したものである。訳文、注釈いずれも上田の手になるが、王教授の講解の中でネイティブ独特の解釈と考えられるものについては、特に「王注」と標記し書出した。上田は中国の近現代文学研究を専門とする者ではなく、誤訳・誤釈も多々あるかと思われる。大方のご叱正・ご指教をお願いする次第である。なお、この講義終了後に受講生よりノートとレポートを提出してもらったが、特にレポートからは訳注作成に際し多くの示唆を受けた。ここに記して感謝の意を表したい。

1. 呉組細：ウー・ツウシアン（1908-1997） 作家、中国古典文学研究者。本名は呉祖襄。安徽省涇県の出身。1929年に清華大学中文系に進み、30年代に「郷土小説」と呼ばれる中国の農村社会を題材にした小説を精力的に発表する。特に代表作とされる「一千八百担」では大家族の崩壊していく様を描くことにより、不平等な社会構造をえぐり出し、中国社会全体の抱える問題点を鋭く指摘している。文体は写実主義的で、対話から登場人物の性格を浮かび上がらせる手法に長けている。解放後は創作活動から離れ、1952年に北京大学中文系教授に着任し、中国古典文学研究の分野におい

て大きな業績を残した。

官官の補品：1932年、北京の清華大学在学中に書かれた作品。主人公の「官官」を語り手として、地主階級の苛烈な農村支配と、当時の都市生活の正負の両側面をリアルに描きだしている。題名は直訳すれば「ぼっちゃんの補精食品」。ここで読者は、「ぼっちゃん」とは誰なのか、「補精食品」とは具体的に何を指しているのか、誰が補精食品を摂取する必要があるのか、それはなぜか、そして誰がその補精食品を提供するのか、といったいくつかの疑問を抱くであろう。しかしこの作品を読了すればこうした疑問は解け、題名が作者の描こうとした主題を見事に言い表していることに気づく仕掛けになっている。

2. 原文は「自己是个乡下人」 王注：自分は子どものときから（安徽の）農村で育ってきたという意味である。当時の上海人の安徽人に対するイメージは、「很土的人」（非常に田舎臭い人間）というものであり、上海暮らしが長い主人公の開口一番のこのせりふには、都会の人間になりたい、特に1930年代最もモダンな上海の人間になりたい、いや自分はもう田舎の人間ではなく上海の人間なのだという意味が込められている。一般に中国の小説の冒頭の一文は大きな意味を持つが、この作品においても、この何気ない一文が「中国の農村の人間は農村に住みたがらない」という全体に通底する主旋律となっており非常に重要である。 按：この主人公の家は典型的な郷紳であるが、十九世紀から二十世紀にかけて、この主人公のように村のエリートが村に住まなくなる傾向が出てきた。その原因の一をイーストマンは1905年の科举廃止に求める。『中国の社会』p123を参照。
3. 原文は「閻王」 王注：閻魔大王は地獄の長官である。これが第一の「官」。
4. 原文は「体面」 王注：経済力があり権力のある人間、つまり役人である。これが第二の「官」。
5. 原文は「一落地便有人喊官官」 王注：赤ん坊が生まれることを「落地」という。ここに第三の「官」に関わる「官官」という言葉がでてくる。「官官」には、1）子どもに対する愛称、2）（大きくなったら役人になってほしいという）子どもに対する希望、3）お役人の家の子孫、という三つの異なる位相の含意がある。この小説の中に主人公の父親や兄弟は出てこないで、一人っ子の彼が役人の身分を引き継がなければならないことを暗示している。
6. 原文は「袖手」 寒いなどの理由で手を袖の中に入れる。転じて、何もしないこと。
7. 原文は「文明人」 王注：ここでは都会の人間のことを指している。その前の「野蛮無味的地方」と対になっている。
8. 原文は「文明人的言談」 王注：日常生活の細々としたことについての話題ではなく、経済活動、国際情勢などに関するハイソサイエティな話題をいう。
9. 原文は「哪一点儿我含糊？」 王注：この句は重要である。主人公がダンスホールや映画館に出入りする際にちっとも出費を気にしない、という点で生活様式、経済状況が都会人に比して遜色ないことをあらわしている。この一段（自己～含糊）の直接出てこないキーワードは「金」である。かつて中国では人間と人間の関係が何よりも重視されていたが、30年代になると金銭がとってかわるようになり、この作品でもお金の問題が第一段落から重要な話題として取り上げられている。
10. 原文は「野鬼」 王注：異郷の地で客死すれば、あとを供養する人のない霊となって餓鬼道に堕ち、苦しむことになるという迷信を母親は信じていた。
11. 原文は「二三百年前的祖遺旧宅」 王注：この言葉も重要である。二三百年前とあるから彼の家は成金ではない。「祖先の残してくれた歴史のある家」つまり、経済的価値のある家ということであり、ここでも母親に関する言説からまた「金」の問題が見え隠れしている。なお、「不要な」「ぼろい」という語感のある「旧」は不適切で「老」につくるべきであろう。
12. 原文は「我理会得母亲这苦衷，年年都回去住一晌」 王注：「一晌」は本来普通、一日のうちのあの一区切りの短い時間を指したが、転じてある一定の時間を意味するようになり、ここでは数十日、数ヶ月を指す。主人公が里帰りするのは母親のご機嫌伺いという意味もあるが、母親を助けてきちんと財産管理をしておかななくてはならないからであろう。
13. 原文は「土匪」 近代中国における匪賊については、フィル・ビリングズリー『匪賊』という優れた社会史的研究がある。ビリングズリーは匪賊を近代中国の一つの社会現象としてとらえ、「あるのっぴきならない状況に囚われながらも、最善をつくしてそこから立ち上がろうとした人々のことである」として、従来の「強欲な悪党」というイメージの再検討を迫っている。そして、中国の為政者たちが断罪のレッテルとしてこの「匪賊」という侮蔑語を乱用したために、小さな窃盗から政治革命まで匪賊のおこないとされ、匪賊に対する理解を困難なものにしてきたことを指摘する。

「こうしたイデオロギー操作の道具として、清朝以前にお上がよく用いた言葉は、“盗”であり、“賊”であり、“寇”であった。これに“匪”という新たな別称がつけ加わるのは、十八世紀の後半からである。もともとは当時の白蓮教徒を指弾するために用いられたのだが、次第に“盗匪”、“匪徒”、“土匪”などの複合語を生みながら、その適用対象を広げていった。(中略)右にあげた言葉はすべて、辺地で取るに足らない騒ぎを起こす不埒な輩、またはその集団を指すのである。なかでも“土匪”が多用されるようになり、地方の無頼漢を意味する言葉として広く流通した。お上にとっては、“土匪”ほど好都合な造語はなかった。“土”の字を冠することによって、この名で呼ばれたひと運動も、“土地”に縛られた卑小さを刻印されてしまう。つまりきっぱりと普遍性を否定される。そして、“匪”は法に従う良民を除く一切の者ども、つまり謀反の徒を意味するのである」(p 23～24)

14. 原文は「大叔」 王注：主人公の父親の弟を指す。
15. 原文は「团丁」 後出の「团防」(地域社会の治安維持のために組織された民間武装集団)の下級構成員。民兵。
16. 原文は「我自幼便不失官官的身份」 王注：「不失」とは「具有」(そなえている)という意味であり、ここでの「官官」とは「文弱の様子」(虚弱なさま)をあらわし、「身份」とは「标志」(しるし)のことである。
17. 原文は「陆柔姬」 王注：踊り子の名前。あとに詳しい説明がある。
18. 原文は「出了乱子」:「乱子」は故障、騒ぎ、事故の意味。どのような事故だったのかあとで主人公の口から語られる。
19. 原文は「身肢终究吃了亏」 王注：言い換えれば「伤了元气」(元気がなくなる)ということである。
20. 原文は「在外面」 王注：「外面」とはここでは都市、特に上海を指す。
21. 原文は「派克牛奶」 おそらく当時の牛乳のブランドであろう。待考。
22. 原文は「卡伯勒乳白鱼肝油」 これも当時、上海などで販売されていた肝油のブランドと思われるが、待考。
23. 原文は「酿奶子」 王注：「酿」は本来、酒・醤油などを作るというのが原義であるが、ここでは生産するという意味で使われている。管理の行き届いた場所で乳牛からたくさんの乳を生産するので、ここではあえて「酿」という言葉を用いたのである。
24. 王注：この段落(我自～奶子)では主人公が虚弱で補精食品を摂取する必要があること、しかし安徽省にはろくな補精食品がないことが述べられ、上海と故郷について繰り返し比較し都市が遙かに勝っていることが強調されている。
25. 王注：「母亲说」から「试试看吧」までが一つの段落となっており、主人公と母親との対話によって構成されている。
26. 王注：主人公はこの母親の言葉を聞くまで、牛乳のことだけしか頭になかったので、母親のこの提案は全く予想外であった。
27. 原文は「偎」 寄り添うこと。もたれかかること。
28. 原文は「这固然不一定是做不得的事」 王注：主人公としては、できるがやりたくないという気持ちを言外にあらわしている。一つの理由は大の男がそんなことをするのはみっともないからであり、もう一つの理由は郷里の女性の容姿は上海の女性とは比べものにならないからである。ここでもまた都会のよさを強調している。
29. 原文は「有的只是」 王注：この四文字は重要である。「有的」とは、ここでは全部、みな、という意味である。
30. 原文は「枯黄干瘪」 王注：この四文字はいずれも人の容貌を形容する場合、貶義語である。「枯」は栄養失調の状態で肌に光沢のないことをあらわす。「黄」は顔色がよくないこと、つやがないことをいう。「干」「瘪」いずれも痩せこけていることを言う。
31. 原文は「安排」 王注：この言葉には「有意」(意図的に)という語感がある。
32. 原文は「调弄」 王注：「打扮」、「妆饰」、「保养」などの言葉に言い換えられる。
33. 原文は「巴黎粉」 当時のフランスの化粧品であろう。待考。
34. 原文は「不会」 王注：そういうことを知らない、あるいは経済的にできない、ということを行っている。

35. 原文は「皱眉摇摇头」 王注：「皱眉」は不満、あるいはこのような農村女性には興味がないという意思表示であり、「摇摇头」は不同意を意味する。
36. 王注：主人公と母親では女性に対し異なる認識を持っていた。主人公は抱きしめ、口づけするだけのものと考えていたが、母親は乳を搾る存在と認識しており、そのために二人の間に「误会」（誤解）が生じ、「解释这误会」（誤解を解く）必要が出てきたのである。
37. 原文は「吮」 口をつけて吸い取ること。
38. 原文は「挤」 王注：この言葉は重要である。「官官的补品」とは「挤」（搾る＝搾取のイメージ）して得られるもの、ということの意味し、この動詞はこのあとでも何ヶ所かで用いられている。
39. 原文は「自然是囉，这个可比牛奶好十倍啦」 王注：「自然」とは「当然」ということであり、「囉」は語気詞で、母親は繰り返し人乳のよさを強調している。
40. 原文は「那就试试看吧」 王注：主人公は今まで女性には「安排给人搂着吻着」（男に抱きしめられ口づけされる）という役割しかないと思っていたが、ここではじめて牛のように人に乳を飲ませる機能もあるということを知り、驚く。この場合、乳母は農村の女性であるから第一の役割はとても期待できないが、第二の役割は多少期待できそうなので彼はついに同意したのである。
41. 原文は「话」 王注：自分のところで乳母を探しているという情報のことである。
42. 原文は「第二天」 王注：事態の展開が速いことを強調する。
43. 原文は「外号叫铁芭蕉」 王注：「外号」とはあだ名とほぼ同じ意味である。「铁」とは「硬」（態度がきつい）ということである。「芭蕉」には二つの意味がある。一つは顔色が緑色で醜いということの意味する。もう一つは、『西遊記』の中に芭蕉扇を使う牛魔大王夫人羅刹女が出てくるが、彼女が非常に「狠」（凶悪）であることから「狠」という意味がある。それゆえ、この女性は「又丑又凶狠」（醜くて残忍）な人間であろう。
44. 原文は「肥头大脑的小毛毛」 王注：「肥头大脑」は赤ん坊がよく太り体も丈夫なさまを言う。中性詞。この言葉はここでは二つのことを物語っている。一つは、この子の母親の乳は非常に質がよいということ、もう一つは、前にも述べられているように蒲柳の質であることが「官官」の必須条件であるから、この肥え太った赤ん坊には「官官」の資格がないということである。「小毛毛」は、金持ちの子どもを「小官官」と呼ぶのに対して、貧乏人の子どものことを指す。「毛」は軽く、重要でない意である（中国語に「轻如鸿毛」という言い方がある）。
45. 原文は「上粗下细」 王注：「上粗」とは「胸很大」（胸が大きい）で「没有腰」（腰のくびれがない）ということである。「下细」とは「腿很细」（足が細い）で纏足のため「小脚」（足首から下が小さい）ということを強調している。魯迅は「故郷」という作品の中で纏足経験のある女性の足を「圆规」（コンパス）のようだと形容しているが、それと同じであろう。
46. 原文は「槁色头发」 王注：「枯黄的顔色」（黄色い 按：黒い色素の抜けた）の髪。
47. 原文は「高脚背」 王注：足の甲が高く盛り上がっていることから、彼女は纏足していたことがある。纏足した女性は歩きにくいためにおしとやかに見える。また、女性が密かに逃げたりしないようにするという意味もある。 按：纏足の文化史については、岡本隆三『纏足物語』、夏曉虹『纏足をほどこいた女たち』が参考になる。
48. 原文は「小鼻子」 王注：中国では一般的に皇帝の鼻が一番高いと考えられ、「龙准」と形容される。普通の人間で鼻が高ければ「有福气」（福運がある）とされるため、彼女が鼻が低いということは彼女には「没有福气」（福運がない）ということになる。
49. 原文は「镶」 王注：「镶」ははめる、ちりばめるという意味で、「金镶玉嵌」などのように美しいものを使うが、ここでは白く乾いた唾液が口の両側に「镶」されているという表現になっている。
50. 原文は「枯黄的脸子」 王注：彼女の健康状態がよくないことをあらわしている。
51. 原文は「汗酸的体味」 王注：彼女があまり体を洗ったりしないということもあるが、やはり彼女の体調がよくないことを物語っている。この一段では、体型に始まり、足、目、髪の毛、鼻、口、顔色、体臭を通して彼女を相対的に描写し、彼女の体の不調を暗示しているが、このあとで彼女の乳房と出す乳のほうは素晴らしいことが強調されており、この一段と好対照になっている。題ともなっている「官官的补品」を作り出すのは他ならぬ女性であるから、彼女の身体の描写は欠かせないのである。
52. 原文は「蓝布褂」 王注：中国の農村女性が衣服の布地の色として最も多く用いるのがこの「藍色」である。

53. 原文は「蹣跚」 よろよろと歩くさま。歩き方が不安定なさま。
54. 王注：次の長い段落は、母親、鉄芭蕉、乳母の三人による会話で構成されている。三人の会話の中の語気、角度、心理状態はそれぞれ違っている。
55. 原文は「丫头」 王注：「丫头」にはいろいろな意味があり、女の子というのが最も基本的な意味であるが、ここでは未婚の若い女性の雇い人のことである。
56. 原文は「双手」 王注：彼女の社会的地位は、大きなお屋敷で使われている女の子よりも低いため、あわてて両手で受け取ったのである。
57. 原文は「折福」 王注：「折」は「亏损」の意味で、「損我的福」（罰があたる）ということである。現代語で言えば「不敵当」（おそれいます）ということである。
58. 原文は「大官官」 王注：前のところではただ「官官」と言っているが、主人公もある程度の年齢になり、また身分の低い人間に相対しているため、「大官官」と呼んでいる。
59. 原文は「长得太快，小时又缺了奶，现在身肢太单薄」 王注：ここで母親は主人公がどうして人間の乳を飲まなければいけないのか、理由を説明しているが、上海での自動車事故で出血が多かったためという本当の理由は話していない。
60. 原文は「我我看你人也结实，也知礼，我喜欢。就是不知你的奶子可好」 王注：前の三句は母親の型どおりの挨拶言葉であり、実際問題として母親が関心があるのは乳の質のことである。
61. 王注：鉄芭蕉がこのようなことをしたのは、一つには赤ん坊の目方をみため、もう一つには、本当に体が丈夫かどうかみためである。
62. 原文は「放着拉拉的男子声音説」 王注：「放」は「放开」（大きくする）である。「拉拉」とは声がしわがれているということである。鉄芭蕉の態度は乳母が「忸怩」とした態度で「低声」で話すのとは対照的に描かれている。
63. 原文は「婆娘」 王注：既婚の若い女性をいう。相手をあまり尊重しない呼び方である。その直前の「太太」（奥様）という称呼和対比されている。
64. 原文は「真肥毛毛」 王注：「真能养肥毛毛」（本当に赤ん坊を大きくすることができる）ということである。ここでは形容詞「肥」が動詞として用いられている。「毛毛」は安徽省の方言である。
65. 原文は「呐」 王注：これも安徽省の方言である。
66. 原文は「龟子」 王注：子どもの呼び方の中にも「等級秩序」があるのが見て取れる。金持ちの家の子どもは「大官官」「小官官」と呼び、貧乏な家の子どもは「毛毛」と呼んだり「龟子」と呼んだりしている。亀は、宋代以前では長寿、富貴のイメージを伴う言葉であったが、宋代以降は貶義語となった。詳しい意味はここでは述べない。「龟子」という称呼は「龟孙」などに比べれば相手を貶めるニュアンスは弱い、いずれにせよ尊称ではありえない。
67. 原文は「可就活是个李逵哥」 王注：「可」は逆接である。「李逵」は『水滸伝』に出てくる好漢の一人で色黒の大男として知られている。ここで鉄芭蕉は二つのことを強調しようとしている。一つは、数ヶ月で赤ん坊が李逵のように大きくなるのだから、乳の質が非常によいということ。もう一つは、このように役に立つ人間を連れてきたのは自分であるということである。手柄顔をしたいがため、「可就活是个李逵哥」というような誇張が入るのである。
68. 原文は「向那笑窝着」 王注：「窝着」とは「裂開」（裂けたように開く）という意味である。安徽省の方言である。「着」のあとにある「逗号」（、）は「頓号」（、）にあらためるべきであろう。
69. 原文は「红齧肉」 赤い歯茎の肉。
70. 原文は「调」 王注ではこれを安徽省の方言とし、①軽くつまむ。②手でもてあそぶの意味があるとするが、待考。
71. 王注：この一段では赤ん坊の様々な部位を描いているが、いずれもこの子が「壮」で「肥」であることを強調している。
72. 原文は「把嘴唇包了一包」 王注：さきほどまでは笑っていたので口が開いていたが、母親から質問されたため、礼儀に則って口をすばめたのである。
73. 原文は「慢气地」 王注：「慢慢儿的」という意味である。
74. 原文は「九月里」 王注：九月中旬以降を指す。
75. 原文は「瞪」 王注：「瞪」は「睁大眼睛看」（大きく目を見開く）の意味である。ここでは彼女は反対の態度を表明することはできないが、今すぐここでひもボタンをはずすこともできかねる。それゆえ、この場にいる唯一の男性である主人公を立ち去らせようと大きく目を見開いたのである。

76. 原文は「造你娘的孽」 王注：「造孽」が一つの言葉であり、三つの意味がある。一つは、仏教用語で悪事を働くと将来因果の報いがあるという意味である。二つ目は、「可怜」（あわれである）という意味である。三つ目は、粗野な言葉で、ここではこの意味で使われている。なぜなら、「你娘的」という言葉が加えられているからである。「你娘的」という言葉を魯迅は「国骂」と言っている。中国人は人を罵るとき、相手を直接罵るのではなく、相手の母親を罵る。一世代上を罵ることにより、相手より優位に立とうとするのである。
77. 原文は「葫芦×奶子」 王注：文学作品あるいは一般の文章において、×印がついて伏せられたものは下卑た、性と関係のある言葉の場合が多い。
78. 原文は「快三十岁」 王注：中国人の感覚では二十六、七歳を指す。一方、これと似た表現で「近三十岁」という言い方があるが、この場合はもっと三十歳に近く、二十八、九歳を指す。
79. 原文は「崩出两个了」 王注：これも人を侮辱する言葉である。「崩」は「生得特別麻利、简单」（あっさりと簡単に子どもを産み落とす）ということである。
80. 原文は「羞涩」 王注：この言葉は、「害羞」「不好意思」の意味であるが、特に若い女性の場合に用いられ、「老人家羞涩」とは普通言わない。
81. 原文は「但母亲已走到她身边」 王注：母親は何が何でも乳母の乳房を見ようと思っていることがわかる。それゆえさきほど乳母が「再望一望母亲」し、止めてくれないかと目で訴えたことも結局は無駄であった。
82. 原文は「忸怩」 王注：「忸怩」は「羞涩」よりも程度が上で、顔が上げられない、まともに相手の目を見られない、汗が出るなど明らかな身体的反応が出る。
83. 王注：この一段の中にある「红了脸」「羞涩」「没奈何」「忸怩」という四カ所の表現を通じ、乳母が乳房を見せるよりほかないことを強調している。
84. 原文は「青的筋络」 王注：中国では絵画のことを「丹青」ということからわかるように中国においては「青」は重要な色であり、濃い藍色あるいは黒色を指す。「筋络」はここでは静脈を意味する。
85. 原文は「通布」 王注：「通」は「通向」、「布」は「分布」という意味で、安徽省の方言である。
86. 王注：この一段で描かれているのは、第一人称の私、つまり主人公「官官」の目から見た農村女性の様子であるが、同時に彼の破廉恥ぶりをそれとなく物語っている。ここには乳房にある小さな褐色の斑点から青い静脈に至るまで詳細に描写されており、彼が非常に細かく乳母を観察していたことをうかがわせる。
87. 王注：ここまでは母親がじっくり見、手で触り乳房を品定めする様子を描いている。
88. この一段落では、主人公と母親、鉄芭蕉がそれぞれ三者三様の「鑑別」をしている。主人公は「大葫芦」と乳母の乳房を形容していることからわかるように、乳房の大きさに着目し乳の良し悪しを見定めようとしている。母親は「白奶」とあることから乳の色に着目しているようである（すぐそのあとでも「色をみればわかる」と言っている）。鉄芭蕉はというと、実際に自分でなめてみていることから、味から良し悪しを判断しようとしている（やはりそのすぐあとで甘くておいしいから赤ん坊がこんなに大きくなったということを述べている）。彼ら三人は乳母を人間とは見ず、ただの物としか見ていないということに注意しておくべきである。
89. 原文は「小龟子养得象猪一样」 王注：これも人を侮辱する言い方であり、「豚のよう」というのは中国語でもよい意味ではない。
90. 原文は「数目」 王注：「数目」とは乳の値段のことを指している。なぜ、母親が直接乳母と値段について交渉せず、鉄芭蕉にやらせるのかというと、彼女は自分の身分が相手よりずっと上であるから直に話し合う必要はないと考えたのである。乳のほうは気に入っても、乳を出す乳母のほうは軽んじて相手にしないのである。
91. 原文は「作得主」 王注：「能够自己决定」（自分で決められる）という意味である。
92. 王注：農村の女性はとりわけ正直であり、しかも相場を知らない。だから鉄芭蕉はわざと乳母自身に交渉させて値段を低く抑えようとしたのである。ここでのキーワードは「老实」（正直）である。この「老实」には正直という意味の他に、「不当に高い値段ではなく、低い原価を言え」というニュアンスがある。もしこの「老实」という言葉がこの句に入っていなければ勝手な値段を言うことができるが、「老实」と言われると乳母のほうは低い数字を言わざるを得なくなる。
93. 原文は「铁嫂子吩咐着奶婆说」 王注：その前にある鉄芭蕉のせりふは、本来この句のあとに来る

- べきものであるが、誰が誰に向かって言った言葉なのだろうと読者に興味をを起こさせるため、あえてこうしている。「吩咐」という動詞は目上から目下へ何かを言いつけるという意味の言葉である。
94. 原文は「请太太看着给」 王注：乳の質に応じて公平な価格を決めて貰いなさいという意味である。
95. 原文は「亏吃」 王注：普通は「吃亏」と言うが、ここでは「亏」（損をする）というキーワードを前に持ってきて意味を強めている。
96. 原文は「上路子」 王注：安徽省の方言で、「合乎一般的道理」（道理にかなっている）あるいは「很合我的意」（自分の意にかなっている）という意味である。
97. 原文は「安详」 王注：母親は乳房の鑑別から値段の話に至るまでずっと緊張していたが、この乳母の言葉を聞き、こちらの言い値で決められそうだとほっとしたのである。
98. 原文は「领」 王注：安徽省の方言である。「专门照顾孩子喂奶」（つきっきりで赤ん坊の世話をし、乳を与える）という意味である。
99. 原文は「三块钱」 王注：三円、つまり銀貨三枚ということである。
100. 王注：ここでは「二回だけ乳を出せばいい」「赤ん坊には今まで通り乳を与えられる」「おまえたちが困っていることはわかっている」などと、恩着せがましく繰り返し強調している。
101. 原文は「大龙头」 龍の模様の描かれた銀貨のことを指す。増井経夫『中国の銀と商人』によれば、洋銀（外国銀貨）が元宝銀と並行して中国で流通するようになったため、清朝政府も光緒元宝（1908）や大清銀幣（1911）などの銀貨を鑄造するようになる。十八世紀以降、中国で流通した銀貨のなかで、龍の頭が刻印されているのは、この光緒元宝と大清銀幣だけのようである。なお、この作品が書かれた数年後、アメリカの銀政策による買い漁りのため、中国から急速に銀貨が消え去り、増井氏は1935年には北京、上海、広州ではもう銀貨はみられなかったと回想している。
102. 原文は「真做得」 王注：「合算」（割の合う）という意味である。
103. 王注：作者のうまいところは、ここですぐに当事者である乳母の反応を描くのではなく、鉄芭蕉の反応から描いているところである。鉄芭蕉は母親が提示した金額が非常に高いのだということを、自分の身に引き比べて大げさに強調している。母親も鉄芭蕉もこのたびの取引は乳母にとってうまみが多く儲けが大きいと言っているが、これは乳母が値段をつり上げないよう牽制しているのである。後のところで上海では一ポンドの牛乳を一月頼むと四円かかるとあり、また前のところで人間の乳は牛乳より十倍もよいと言っていることから考えれば、一ヶ月一円半という取引は乳母にとって本当に得になるのだろうか。
104. 王注：ここでの三人の態度はそれぞれ異なる。作者は「嚷」（大声で言い立てる）という動詞で鉄芭蕉を表現している。母親の方はこれで商談がまとまったと考え、安く上がることに満足し笑みを浮かべている。乳母があれた口角を舌でなめながら恥ずかしそうに笑っているのは、金額に不満があるが文句が言いにくいいためである。
105. 王注：ここで乳母がとったやり方は、先に相手のご機嫌を取り結ぶような言葉を述べ、それから自分の本当の考えを述べるというものである。ここで「一品」という言葉が出てくるが、旧中国の九等にわかれた官位の最高のものを言う。ちなみに県長で「七品芝麻官」、科長レベルの郷長が「九品」であり、「国务院副总理」レベルが「三品」、「一品」だと総理よりも上ということになり、主人公が将来、一品官になるというのは乳母のお世辞もここに極まれの感がある。
106. 原文は「我们再好好来啃点元宝边」 王注：この前のところで乳母は「奥様は慈悲深い方ですから」と言っているが、これは「话中有话」（その言葉には別の意味がある）であり、彼女が本当に言わんとするところは「希望太太再多发点儿善心」（もっとお情けを頂戴したい）、具体的には「多沾点儿钱」（もっとお金をいただきたい）ということである。「官」になれば金を儲けることができる。それゆえここで「官」から「钱」に話題がかわるのである。
107. 王注：乳母は生活が苦しいことを具体的に訴え始める。彼女が乳母として働きに出ないとやっていけないという苦しい家庭状況が描かれている。
108. 原文は「残废人」 王注：現在は「残疾人」と言う。
109. 原文は「快点儿挤奶子是正经」 王注：鉄芭蕉は乳母の話を遮る。この言葉のもう一つの意味は「价钱定下来了」（金額の話はもうすんだ）である。
110. 原文は「再哭你那些丧」 王注：中国では死者を野辺送りするとき、泣きながら故人の生前の事績を語る風習があった。乳母の報酬の額についての申し立てや困難な家庭状況についての説明を鉄芭蕉は「哭丧」と表現している。この「哭丧」はここでは「说穷」（自分の貧しさを訴える）という

意味である。

111. 王注：乳母と鉄芭蕉の対話の中には多くの「讥讽」（遠回しな言い方）がある。「奥様は慈悲深い方」「生きていくのも簡単なことじゃない」「早く乳を搾るのが筋」などという言葉には裏の意味があるので要注意である。
112. 原文は「青蛙」 王注：中国で人間の声を「青蛙」と形容するとき、二つの意味があり、一つは声が大きいく、もう一つは耳障りなことを意味する。主人公、ひいては作者の鉄芭蕉に対する反感が読みとれる。
113. 原文は「扳」 王注：「扳」は「移动一件很重的东西」（重いものを動かす）という意味であり、ここでこの言葉を選択していることから乳母の乳房が大きいくことがよくわかる。
114. 原文は「婆娘」 王注：これは乳母を馬鹿にした称呼である。現在の中国では口げんかのときなどにしか用いられない。
115. 原文は「人到底比牛聪明呀」 王注：たんに人間のほうが牛より賢いと感心しているのではなく、牛と違って何から何まで自分でしなければならない乳母の愚かさを諷刺している。
116. 原文は「你家里有些什么人」 王注：母親は乳母が相場より悪い条件でも飲まざるを得なかったことから生活がよほど苦しいのであろうと察し、同情したのである。同時に、これから自分の家で雇う相手の家庭状況をもっと理解しておこうという意図もこの質問にはあったであろう。
117. 原文は「老不死」 王注：年齢がいつているのにまだ死んでいない、という意味であり、乳母の舅を非常に馬鹿にした言い方である。舅だけでなく、彼女の夫は「小秃子」（秃子も馬鹿にした言い方）、赤ん坊のことは「小毛毛」と呼んでおり、乳母の関係者みんなを鉄芭蕉はあなどっている。
118. 原文は「西村杨树墩」 実際にある地名なのかどうか不明。
119. 原文は「退佃」 小作契約をうち切ること。規約に定められた分量を納められない場合、地主が一方的に契約をうち切り、別の家に小作に出したケースが『近代徽州租佃関係案例研究』はいくつも載せられている。
120. 原文は「调皮」 王注：「不听话」（聞き分けのない）、「给他们闹乱子」（問題を引き起こす）という意である。
121. 原文は「壳」 王注：長江以南では「ké」と読み、長江以北では「qiào」と読む。
122. 原文は「只他大箩小箩全上麻壳秕」 王注：「麻壳秕」は質の悪いもみ米のことである。「大箩小箩」というのはここでは「不规范」（規範に合っていない）ということである。他の小作農は同じかごに同じ品質の米をいれて納入するが、彼らのところは貧しいため大きさのそろったかごをきちんとそろえられないのであろう。按：「秕」は中国南部から東南アジアにかけて栽培される長粒種のうるち米。小作代を納めるのに、収穫物を納める場合と貨幣で納める場合があるが、安徽省の場合、宿県を例にとれば20年代の初めて現物納が実に97.3%を占めていたという（全国平均は約75%）。また物納にも「分成制」（最終的な収穫量を地主と小作農で分益する形態）と「定額制」の二種類があるが、いずれの場合にも安徽の地租率はかなり高い。『安徽現代史』p14の「表1.4 安徽各類土地的地租率」を参照。
123. 原文は「石」 容積の単位。一石は百升に相当する。
124. 原文は「蜗牛似地」 王注：主人公は老陳に対し嫌悪感を抱いている。相手をさげすんだ形容のしかたである。
125. 原文は「学会了一只天花乱墜的嘴」 王注：普通は「嘴」を数える量詞として「只」は用いない。おそらくこれは安徽省の方言であろう。「天花乱墜」のもともとの意味は空から花が降ってくるといことで、色とりどりで華やかなさまを形容するが、現在では根拠のない、出鱈目なことを言う、という貶義で用いられている。田舎の人間は本来素朴で無口であり、老陳の口がよくまわるのは後天的に学習したのだと主人公は考え、ここでは「学会」（習って身につける）という動詞を使っている。
126. 洪水や干ばつ、イナゴの害などの自然災害は確かに十九世紀以来増加しており、イーストマンは民国期以降、災害が一層頻発化するのは政治的崩壊に因るところが多いのではないかと述べている。『中国の社会』p126 参照。
127. 原文は「高砧田」 高く隆起したところにある田。
128. 原文は「难车法」 「車」はここでは動詞として用いられ、水車で水を汲むという意味である。
129. 原文は「世界」 王注：現実、社会という意味である。

130. 原文は「团防捐」 王注：民兵の組織を維持するため、各戸で負担する税。
131. 原文は「双手握不来四拳头」 王注：安徽省の俗語であろう。労働力が足りないことをいう。
132. 王注：老陳はなぜ彼が小作料を滞納せざるを得ないかという理由を自然、社会、自分の家庭状況という三つの角度から述べている（セミコロンで分けられていることに注意）。
133. 原文は「遭了夹收旱」 王注：田植えを終えたばかりの時期と、苗が生育するのに雨が必要な六月頃に二度日照りにあったということである。
134. 原文は「抗租不法」 法律用語。意図的に小作料を納めないこと。『近代徽州租佃関係案例研究』p 326によれば、「抗租」にも、質の悪い穀物をまぜる、払う時期を引き延ばす、納める時期に夜逃げする、一部だけ納める、契約解除を申し出て小作料の減免を願い出るなどのやり方があるらしい。また、イーストマンは小作料の滞納に対して地主がなすすべがなかった例を挙げ、「小作農民は全体として地主との関係において、無力ではなかった」としている。『中国の社会』p108～109参照。
135. 原文は「句句在理路上」 王注：前のところで老陳の話が「天花乱墜」（根拠のない出鱈目な話）とあるのと対照的である。按：おじは小作の契約書に記載されていることを盾に老陳をなじっているが、これとほぼ同じ内容の契約文書が『近代徽州租佃関係案例研究』p12～14に見える。
136. 原文は「斩钉截铁」 王注：母親とは違い、全く譲歩しないという強硬な態度をあらわしている。
137. 原文は「瞪」 王注：「瞪目结舌」（目を見開き口から言葉が出ない）というのと同じである。
138. 王注：この長い一段には全く引用符号がなく、それぞれの人々がしゃべったおおよその内容が記されているだけだが、そこから各人物の身分、性格がよく浮かび上がってくる。
139. 原文は「流落」 王注：現在は「流浪」「流离」という言葉を使う。
140. 原文は「我救他回来的」 王注：一体誰が誰を救ったのか。
141. 原文は「新爱」 王注：主人公が今まで多くの女性と関わってきたことを示している。
142. 原文は「蟾宫跳舞厅」 按：このような名前のダンスホールが上海に実在したのであろうか。待考。「蟾宫」は月の別称である。
143. 原文は「有一身象牙似的肉」 王注：「象牙」はここでは肌の色を形容している。この陸柔姫という女性を描写する際に、まず「肉」（欲望の対象）について主人公が述べはじめたことに注意しなければならない。
144. 原文は「白话信」 王注：この当時、口語で手紙を書くというのはかなりモダンなことであり、女性で書ける者はほとんどいなかった。
145. 原文は「袅娜多姿」 王注：草木のようにしなやかであるさま。一般に女性のしなやかな姿を形容する。
146. 原文は「茶舞会」 王注：お酒は出ず、果物とお茶で楽しむ舞踏会のことである。
147. 原文は「因为一时高了兴」 王注：現代中国語では、「高兴」は一つの言葉（形容詞）であり、「高」と「兴」の間に「了」をいれることはできず、この句は文法的な誤りを犯している。ここでは作者は主人公の文化的レベルが決して高くはないことを表現したかったのであろう。
148. 原文は「皮斯」 王注：舞曲の名前。
149. 原文は「火热天」 王注：気温が四十度を超える上海、南京、重慶、南昌の夏の暑さを「火热」（火のように暑い）と形容できるが、他の都市はせいぜいのところ「热」（暑い）どまりである。
150. 原文は「汽车去兜风」 王注：この時代、運転手に運転させ、自動車でドライブに行くというのは非常にモダンなことであった。
151. 原文は「学着时髦文学家的句子」 王注：中国人は「时髦」（モダン）なものはすぐ過ぎ去ってしまふと考えており、「时髦」という言葉は多少悪い意味を持っている。また「学」とあるが、これは主人公が流行を追うだけで彼自身には学問がないということを皮肉っているのである。
152. 原文は「愿意和你一同死」 王注：これは二人の熱烈なる欲望をあらわしている。これを愛と呼ぶべきなのかどうか私はわからない。この一段のキーワードは「热」である（「热闹」「热天」「热风」「耐不住热」「热欲」など）。
153. 原文は「闯」 王注：「闯」は意識的にぶつかること、「撞」は無意識にぶつかることであり、普通であれば中国人は電信柱にぶつかるとうときは、「撞」を用いる。安徽方言の干渉をうけて「撞」とすべきところを「闯」としてしまったのかもしれない。
154. 王注：その直後で主人公はこれを「玩话」（冗談）と言っており、彼がいかに真心のない人間であることがわかる。

155. 原文は「不想玩话竟成了讖语」 王注：誓いにせよ。のろいにせよ、言ったことが本当になるのが「讖语」である。一般的に中国人は「讖语」を信じており、あとから災いがもたらされるのを恐れ、うかつにこのようなことは言わないものである。
156. 原文は「不知是喝了酒，还是疲乏了」 王注：おそらく疲労であろう。朝まで運転させられ、しかもスピードを出すようにせつつかれていたのだから運転手は疲れていたに違いない。運転手が酒を飲んでいたら運転手の過失になるが、あとを見ると主人公一人ですべてを弁償している。主人公も自分に非があることはよくわかっていたのだろう。
157. 原文は「岔子」 王注：「岔子」は問題とかしくじりとかいった意味であり、死者が出たくらいであるからここは「事故」というべきところを、作者はあえて主人公の口から「岔子」といわせ、踊り子が死んだことを重く見ていないプレイボーイの主人公の心理状態を描出しているのである。
158. 原文は「抚恤费共近一万元」 王注：乳母には一ヶ月一円半しか支払わないのに、ここで一万円近く「抚恤费」を出すはめになっているから、大きな代償を払わされたといえるだろう。「抚恤」とは救済の意味で、死者の家族にお金をあげて救済するのである。
159. 王注：この段落では、短い物語を通じて中国のいくつかの道理を語っている。それは「物極必反」「乐极生悲」「生极归死」「假极转真」ということであり、いずれも物事が「極」（頂点）に到達すれば状態が逆転するということで、老子の言ったとされる「反者道之動」（『老子』第四十章）という言葉に集約できるのである。
160. 原文は「损血」 王注：安徽省の方言であり、失血という意味である。
161. 原文は「悲伤过度」 王注：やはり主人公も陸柔姫の死にある程度の責任を感じていたらしい。
162. 王注：この部分には現代語とは異なる、五四時期の白話の特徴が多少ある。たとえば「绝大打击」「毫不恢复」などの表現は現在あまり見られない。
163. 原文は「款子」 王注：「款」はかなりのまとまったお金のことをいう。たとえば中央政府から地方へ補助金を交付することを「拨款」という。
164. 原文は「补血注射」 王注：当時は輸血のことをこのように言ったのである。
165. 原文は「和蔼可亲」 王注：話し方が穏やかで、相手に安全な感じを抱かせる人をいう。一般に中年やお年寄りを形容する場合に用いる。
166. 原文は「打着洋泾浜的上海话」 「打」はここでは話すという意味の動詞である。「洋泾浜话」は、中国人がイギリス人との取引の際に用いた混成語のことを言うが、ここでは外国人の方がブローケンではあるが上海語を話し意思の疎通をはかろうとしている。洋泾浜一帯は当時、上海の商業の中心地区であり、上海の共同租界の総称でもあった。
167. 原文は「交関好」 王注：上海語で「挺好」「頂好」（たいへんよい）という意味である。
168. 原文は「純潔」 王注：ここでは世間知らずということと同義語である。
169. 原文は「条凳」 背もたれの無い長椅子。
170. 原文は「阿瘪三」 王注：「瘪三」たる条件は二つあり、一つはすることがなくぶらぶらしていること、もう一つは痩せている若者であるということである。「瘪三」は上海にのみ見られる特殊な現象と言ってよいであろう。中国の他の地域の人間は比較的がっちりした体型をしているが、上海人は背が高くひょろひょろしているので、冗談で「豆芽（モヤシ）型」と言うことがある。
171. 原文は「有了钱，原来什么东西都好买的」 これは主人公が前の一段から引き出した一つの結論であり、彼の金銭哲学をあらわしている。つまり中国人がよく口にする「有钱能使鬼推磨」（地獄の沙汰も金次第）ということである。
172. 原文は「皱着高鼻子上的皮」 王注：中国語で「皱鼻」（鼻の頭に皺を寄せ、不満や嫌悪をあらわす）というのは相手を軽んじる表現である。
173. 原文は「撒烂污」 汚いものをまきちらす、というのが原義。ここでは「汚い」「良くない」という意味であろう。 王注：今の上海語では「拆烂污」ともいう。
174. 原文は「毒来些、齷齪来些、要不得、要不得」 「来些」は吳方言で、形容詞のあとについて程度の甚だしいことをあらわす。「齷齪」は汚いという意味である。 王注：同じ文句や似たような表現を繰り返し強調しているのは、西欧語の母語の影響であろう。
175. 原文は「雉妓」 王注：妓女には二種類あり、一つは遊郭で営業している者、もう一つがこの「雉妓」で野外で客引きをしている「野鸡」（夜鷹）である。按：漢の呂後の名が「雉」であったので、これを避けて「野鸡」と呼び替えたという。

176. 原文は「这人的血一定比较可靠」 王注：「可靠」（信頼できる）という言葉の前に「一定」（必ずという絶対的な肯定）と「比较」（比較的という相対的な肯定）という、普通は並べて使われない二つの修飾語があるが、これはおじの迷いを反映したものである。おじは、本当になら「比较可靠」と言うべきところだが、「比较可靠」であれば主人公は輸血を拒むかもしれないと思い、「一定」と言うべきか「比较」と言うべきかためらって結果的にこのようなおかしい文になってしまったのであろう。
177. 原文は「见世界」 王注：安徽省の小さな農村から上海という大きな都市へ出てきて、見聞を広めることをいう。 按：中国租界は 1932 年には六万五千人を数え、この数字は省別にみると江蘇、浙江について第三位であり、いかにたくさん安徽人が上海へ出稼ぎに来ていたかがわかる。章有義『近代徽州祖佃関係案例研究』p53「表 1-2 1929 年至 1936 年上海華界市民籍貫統計表」を参照。
178. 原文は「活该」 王注：「自作自受」（自業自得）ということである。
179. 原文は「花心了」 王注：「动心」（心を動かす）という意味に近いが、「花心」（心が浮つく）の方が程度が甚だしい。
180. 原文は「溜」 王注：こっそりと他の場所へ行くことである。ハゲは堂々と自分の力で上海に乗り込むのではなく、布売り商人について、犯罪者のようにこそこそと上海へ出かけて行ったことをあらわしている。ここの「小子」「见世界」「溜」などの言葉にはみなハゲを貶めるニュアンスがある。
181. 原文は「浦东」 上海の浦東地区。黄浦江の東側の地域。
182. 原文は「粗役」 力仕事のこと。粗活。そのあとにこの仕事の賃金が一日「三毛」であったとあるが、1930 年の標準的な労働者の家庭の月収が約四百十六円だったことからすると、かなり安い金額である。ちなみに 1930 年の物価水準でみると、三毛で鶏卵が十個、生の豚肉が一斤購入できる。忻平『従上海發現歴史—現代化進程中的上海人及其社会生活（1927-1937）』p327 ～ 346 を参照。
183. 原文は「王八蛋」 「王八」（あるいは「忘八」とはカメ（スッポン）のことであり、「蛋」は卵を指す。中国では雌のカメは淫乱な生き物とされ、「父親が誰だかわからない子」という意味で人を侮辱する際に用いられる。非常にきつい罵詈雑言である。
184. 原文は「他说是什么和日本纱厂竞争，亏本太多才倒的」 解放前、上海には民族資本、外国資本の紡績企業の工場が集中していた。日本の企業は 1902 年に三井物産上海支店が民族資本の紡績工場を買収したのを皮切りに、東洋紡、内外綿、日本綿などの大手が次々に進出し、急速な発展を遂げる。これらの企業がいわゆる「在華紡」であり、五四運動をきっかけに工場のストライキが始まったり、五・三〇事件の引き金となった顧正紅虐殺事件が起きるなど、中国の民族主義運動と深い関わりがあった。NHK ドキュメント昭和取材班編『上海共同租界』『中国ナショナリズムの勃興』を参照。中国の民族資本による紡績企業の歴史については、嚴中平『中国棉紡織史稿』をはじめ非常に多くの研究蓄積がある。
185. 原文は「信他的胡说八道」 王注：誰が彼の出鱈目を信じようか、という意味である。
186. 原文は「歇了工」 一般的な意味は「仕事を休む」であるが、ここでは休業、操業停止の意で用いられている。『漢語大詞典』では「休業（多指工业企业）；工程中止。如解放前，在官僚资本主义的压迫下，有许多民办企业被迫歇工」と説明している。
187. 王注：主人公ははやく輸血してもらいたいため、焦っておじにこのように聞いたのであるが、この問いかけはおじを見くびりすぎている。
188. 原文は「你这孩子真叫不懂世故」 王注：これは主人公を非難する言葉である。「世故」には良い意味と悪い意味がある。「懂世故」というような場合には、世の中の複雑なことを掌を指して説明できるくらいよく知り抜いているという、良い意味で用いられている。しかし「世故很深」という場合は、狡猾という悪い意味で使われる。
189. 王注：おじがハゲに金を恵んでやらなかった理由は、布売り商人が連れてきたので自分とは全く関係がないからということであり、さらに彼の話の真偽のほども確かではないためである。
190. 原文は「头上披着几根黄草似的稀毛发」 王注：「披」とは髪の毛が立っておらず、みな横になっている状態を指している。「几根」とあるが本当に数本しか髪がないわけではなく、髪がうすいことを意味している。また髪を「黄草」と形容しているが、これはハゲの栄養状態が悪いことを物語っている。漢方医学では髪をその人の健康状態を判断するバロメーターとしている。 按：「黄草」とはコブナグサのこと。染料用。上海近辺ではわらじを編むのに用いられているという。
191. 原文は「两只眼睛向上吊」 王注：目がつり上がっているというのは本来、悪い意味ではなく、京

劇の役者などもみな隈取りで目がつり上がっている。しかしここでは見る者に凶悪な、猙獰そうな印象を与える悪相として描かれている。

192. 原文は「褂」 単衣の短い上着。 王注：上着である。普通は袖がない。
193. 人名。陳嘉庚（1874～1961）、福建省同安県の出身。有名な華僑の実業家、教育家、社会活動家で、熱烈な愛国主義者としても知られる。シンガポールでパイナップル缶詰工場、米屋、ゴム園などを経営していたが、1916年以降はゴム製品に力を入れ、最盛期には地球上の至る所でそのゴム製品が売られていたと言われる。
194. 原文は「喊」 王注：ここでは挨拶をするという意味である。ハゲも官官を覚えていたのであろう。
195. 王注：病室の調度品を「打量」（じろじろ観察する）したのである。
196. 原文は「登」 王注：「登」は「呆」（とどまる）という意味である。
197. 原文は「顶刮刮」 王注：素晴らしい、非常によいという意味である。「顶呱呱」とも表記する。
198. 原文は「夸特」 クォート；ヤード・ポンド法の量の単位。ガロンを基本単位とする。1クォートは1/4ガロンで、1.136リットル。夸尔、夸脱とも表記する。 王注：3クォートは約3.4リットルで、一回の輸血の量としては非常に多い。にもかかわらず、医者「3クォートもあれば十分です」などと何でもないかのように言っており、作者はこの重要な場面で、目に見えない当時の社会の残酷さを巧みに描き出していると考えられるが、ただ、作者がこの方面にくらく、適当に数字を書いたとか、計算間違いをしたという可能性も全くないわけではない。
199. 原文は「居为奇货」 ここは成語の「奇货可居」から来ている。「奇货居くべし」とは、珍しい品物はしまっておいて、よい値段が出るのを待つこと。秦の商人呂不韋が、趙に人質となっていた秦の王子の子楚を助け、子楚が秦の荘襄王となり、呂不韋はその大臣となった故事に基づく（『史記』呂不韋伝）。転じて、何かを種にひともうけしようとたくらむこと。
200. 原文は「敲我竹杠」 王注：「敲竹杠」とは「漫天要价」（法外な値段をふっかける）という意味である。
201. 原文は「我家大官官可怜你，怕你在外乡流落」 王注：前のところに「我救他回来的」という句があったが、ここにも是非の転倒が見られる。主人公はハゲが上海で流浪しているのを心配したのではなく、逆にハゲが郷里に帰ってしまうのではないかと心配し、急いでおじに探しに行ってもらったのであるから。
202. 原文は「你莫想错了路头」 王注：「你不要打错了算盘」（計算間違いをしてはいけない）と警告しているのである。
203. 原文は「看他家乡人分上」 王注：「看～～的分上」というのは非常によく使われる言い方である。「分上」というのは「面子上」（メンツ）「缘分」（ゆかり）などと同じで、関わりを度をあらわす。
204. 原文は「发起寒热来」 王注：「寒」とは「发冷」（寒気がする）、「熱」とは「发热」（熱が出る）ということであり、「冷热交替」（寒気と熱が交互に襲ってくる）ということである。 按：マラリアで出る熱を特に「寒熱」という。
205. 原文は「疟疾病」 マラリア。王注：マラリアに罹ることを中国では俗に「打摆子」と言う。
206. 原文は「轻言静语」 成語「轻言细语」（話しぶりが静かで穏やかである）とほぼ同義であろう。
207. 原文は「替」 「～～にむかって」という意味で用いられている。
208. 原文は「迷迷糊糊」 王注：「时而清醒，时而睡觉」（目が覚めたり眠ったりする）という状態が「迷迷糊糊」である。
209. 原文は「迫着回家」 王注：「迫」とは「強迫」（無理矢理に）であり、主人公は退院後も続けて上海に留まりたかったようである。
210. 王注：母親が乳母に同情して家族のことをたずねたとき、鉄芭蕉が横から口を挟み、彼女の舅と夫が誰であるかを言う。そしてそこから主人公の回想が数ページ分挿入され、ここで回想が終わってまた母親が続けて質問する、という展開になっている。
211. 原文は「打」 王注：北中国の口頭語である。「自从」（～より）という意味である。
212. 原文は「到省里去当兵」 「省里」とは省の首都のことである。 王注：「当兵」（軍隊に入る）とあるが、国民党の部隊に加わったのであろう。
213. 原文は「这种下种老公」 王注：「下种」は下賤な、という意味の他に「只会播种的老公」（子どもを産ませることしかできない亭主）という意味が加わっている。陰陽学では女性が田地、男性が種子ということになっている。

214. 原文は「冤枉他顶了个龟子头」 王注：「龟子」はここでは男性を指している。言わんとする意味は、「他头上是个男人的头，可是没有做男人的事情，所以冤枉」（頭には男の頭がついているのに、男としてするべきことをしない、だから男の頭があっても無駄なのである）ということである。
215. 原文は「亲了几个嘴」 王注：口と口をあわせるのが「亲嘴」であり、ここでは赤ん坊の顔に軽くキスするだけであるから、「亲了几下」とするのが適当であろう。
216. 原文は「宝贝老子」 王注：「宝贝」（大切な）と言ってもここでは普通のよい意味ではなく、「不争气」（情けない）という意味で使われている。このように一つの言葉がもともとの意味と全く反対の意味になる現象は、「冤家」（かたき・愛しい人）などのように、中国語にはしばしば見受けられる。
217. 原文は「又做得，又驮得」 王注：「做」は「耕田」（田を耕す）ということであり、「驮」とは具体的には「背一些东西进城去做生意」（ものを背負って町へでかけ商いをする）ということである。
218. 原文は「即便抱起她孩子走」 王注：「即便」は一つの言葉ではなく、「即」は「立即」、「便」は「就」の意である。まだこの時点では立ち去っていないので、「走」の前に「要」という助動詞を入れるべきであろう。
219. 原文は「汤水」 王注：中国で「汤水」と言えば、普通肉汁を含んだスープをいう。
220. 原文は「添福添寿的话」 王注：「家庭会更幸福！」（ご家庭はさらなる幸福に恵まれるでしょう！）といった類のお世辞である。相手の機嫌をとるような感謝の言葉である。
221. 原文は「把奶隔水煨热」 王注：ある容器に水を入れて沸かし、その中に別の容器に入れた乳を入れて温めるのである。
222. 原文は「甜盈盈」 王注：「盈盈」とは充滿しているという意味であり、ここでは非常に甘いということである。少し甘いのであれば「甜丝丝」という。
223. 原文は「失时」 時機を失するの意である。
224. 原文は「野蛮無味」 王注：農村を「野蛮無味」といい都市を「文明」といっているが、1930年代の中国ではよく用いられた形容である。「無味」とは、この田舎では素晴らしい人乳は手に入るものの、遊ぶ場所がなく暮らしてつまらない、ということである。
225. 原文は「闹土匪」 王注：「土匪的动静很大」（匪賊の動きが活発である）という意味である。
226. 原文は「村镇」 村と鎮はレベルの異なる行政組織であり、行政組織の縦のヒエラルキーでは、中央—省—市—地区—郷—鎮—村となっている。なお、アメリカの人類学者、スキナーは、解放前の調査をもとにマーケットタウンを核にいくつかの村から構成される市場共同体モデルを提示したが、この市場共同体が郷・鎮の行政範囲に相当すると考えられている。西澤治彦「行政組織と農村」（西澤治彦他編『中国』所収）参照。
227. 原文は「把些土匪斩草除根」 王注：「斩草除根」とは匪賊たち全部を殺すことをいうのであるから、「（一）些土匪」はおかしい。おそらく印刷の段階で「那」が「些」の前からぬけ落ちたのではないか。
228. 原文は「七星嶺」 民国期の『涇県志』を参照したが、これに近い地名は見あたらなかった。待考。
229. 原文は「嘯聚」 多く匪賊などが呼び合い集まる。糾合する。
230. 原文は「枪枝」 銃器。銃の総称。
231. 原文は「县署」 県庁。県の役所。
232. このように匪賊が県城に攻撃を加え、占拠するということは当時しばしば起きていた。ここでこの匪賊は手紙を出し要求しているが、これも匪賊たちになるべく兵員や弾薬の消耗をおさえようと、よくやった手であり、彼らはそのために手紙がちゃんと書ける知識人を一人は連れていたといわれる。注13前掲書参照。
233. 原文は「团防」 『漢語大詞典』には「第一次国内革命战争时期，地主阶级反动武装的指挥机关」とあり、「团防」あるいは「团防局」は、主に農民一揆や革命運動を弾圧するために地主階級によって組織・指揮された武装集団という見方をされがちであるが、匪賊と協力関係にあった团防も多かったらしい。注13前掲書参照。
234. 原文は「通路」 王注：「大路小路、一切通行的道路」（あらゆる通り道）ということである。
235. 原文は「加岗」 王注：もともと「岗」（見張り所）があったのだが、そこに詰める人数を増やしたのである。
236. 原文は「拒询」 王注：「拘」とは「拘留」であり、「询」とは「审讯」（尋問する）の意味である。

237. 原文は「坐谈」 王注：「闲坐闲聊」（用もなくのんびり腰掛けて無駄話をする）という意味である。
238. 原文は「宗祠」 ある一族の廟。祖先の位牌が祀られている。ここでは宗祠の中に国防局の本部が設置されているが、呉組組先生の作品の中では宗祠が重要な意味を持つことが多い。
239. 原文は「聚会」 王注：「聚会」は「开会」ほどかしこまった語感はないけれども、それなりの目的があって集まることを言う。
240. 原文は「扫帚星」 中国では昔から彗星は天下大乱の予兆であるとされてきた。明代の日用類書『万卷星羅』卷一天文門には「星帚行所向之方百日内賊寇生」また「彗星体如扫帚而長、此星若見主兵起」とある。
241. 原文は「地方上」 住んでいる場所を指す。「当地。多指统一一个行政区域而言」（『国語辞典』）
242. 原文は「羽毛丰满了」 王注：匪賊をタカに喩えている。だんだんと人数が増え、力をつけてきたらば、という意味である。
243. 原文は「那時看好世界」 王注：反語である。「世界乱、世界不好」を目にすることになるのである。ここで強調したいのは、早く手をうって匪賊を殲滅しないと「天下大乱」になるぞ、ということである。
244. 原文は「运数到了」 王注：どのような「运数」が到来したのか。「劫数」、つまり悪い運命がめぐってきたのである。
245. 原文は「凡是都有个数」 王注：あらゆる出来事は一定の時間を経てまた起こるという意味である。
246. 王注：このようにあらゆるところで見られる貧困と衰退は、みな厄運のせいだとこの老人は言いたいのである。中国には「在劫难逃」（運命で定まっている厄災からは逃れられない）という言葉があるように、このような考え方が広く信じられている。
247. 原文は「话是十分有道理」 王注：これは主人公の評価である。最初に話をした幹部は、匪賊をはやく退治しないとまずいことになる、と現実的な分析を披瀝したが、彼も彗星が出ると天下が乱れるという迷信を根拠にしている。二番目に話をした老人は、「劫数」というより普遍的な迷信によって分析している。さて次は若い世代の分析だが、これは経済分析ということができると思う。
248. 原文は「新奇」 王注：「新颖」（目新しい）ということであり、普通はよい意味で使われる。
249. 原文は「在外面做店友」 王注：「外面」とは安徽省以外のところか、あるいは安徽省のどこかの町を指している。「店友」は普通は店員の意味であるが、避暑のため帰省していたとあることから、それなりの地位があるものと思われる。おそらく彼自身が商売を営んでいるのであろう。
250. 原文は「远房」 王注：同姓で、何世代か前に直接の血縁関係があった遠縁の親戚のことである。
251. 王注：いここは開口一番、迷信に基づく分析を否定する。
252. 原文は「把钱给外国人骗夺去」 王注：「钱」とは中国あるいは安徽のお金のことである。「给」はここでは受け身をあらわしている。
253. 原文は「记得我们小时」 王注：主人公を含む自分たちの世代が子どもだった頃という、この小説が書かれたのが1932年であるから、おそらく1910年代か20年代の話であろう。
254. 原文は「土布」「洋布」（機械織りの木綿布）に対し、中国産の地織り木綿をいう。手織り木綿布。 嚴中平『中国棉業之發展』p 224によれば、安徽ではほとんど棉は生産されず、周囲の江蘇・浙江・江西・湖南から供給をうけていたが、家庭内織物業は発達しており、1934年の調査では全省73県中、43県に家庭内手工業レベルの織物業者がいた。
255. 原文は「纸捻」 紙こより。こより。かんぜより。「火紙」（麦藁や竹などを原料にして作った一種の紙に硝石を塗ったもの）をこよりにしたもの。火打ち石などで点火して火種とする。
256. 原文は「旱烟」 乾燥した煙草の葉をもみほぐしたもの。きざみ。手巻き、あるいはきせるで吸う。「水烟」（水煙草）に対して。
257. 原文は「大英牌、小刀牌」 当時のシガレットのブランドであろう「大英牌の煙草十本入りが十萬元しておるのである」（内山完造『中国人の生活風景』p185）
258. 原文は「东西自己制了自己用、钱是流来流去在自己人手里」 王注：これは典型的な中国の自給自足の考え方である。農業社会の考え方である。「自己」とは中国人のことである。
259. 原文は「洋布」 機械織りの木綿布。平織り布。
260. 原文は「竹布」 綿布の一種。リンネルの類。厚地キャラコ。アイリッシュ布地。
261. 原文は「衫裤」 メリヤスのズボン、あるいは上着とズボン衣服全体の総称。
262. 原文は「美孚亚细亚洋油灯」 家庭用アルコールランプ。「美孚油」（輸入石油の名称；スタンダー

- ド石油)を用いることから。吳方言。アメリカの商人が中国で苦勞しながらこのランプの販路を広げていくさまを描いた『支那ランプの石油』という小説がある。
263. 王注：これは愚かしい考えであり、不正確な分析であると考え。この考え方の根底には中華思想がある。彼は、豊かだった中国から外国人があの手この手でお金を奪っていったため、中国がだめになったと考えているが、既にその前から鎖国のため中国は世界から後れをとっていたのである。按：洋布を初めとする外国製品が農村部にまで流入し、国内手工業に打撃をあたえ、農村の自給自足的経済を崩壊させたというこの主張は、現在でもかなり広く信じられているが、イーストマンはまず、輸入貿易は一般の中国人に対してそれほど大きな影響を及ぼさなかったとして、アルバート・フォイエルワーカーの「1930年代に、湖南省や四川省の農民が内外綿（日本資本の在華紡）の服を着、B A T（英米煙草会社）のタバコを吸い、明治製糖の砂糖を使っていたと主張する者は、証明するために苦勞することになる」という言葉を引用している。そして、1930年以後も中国国内の手工業は競争力を失っていない証拠として、1933年の段階で、手工業生産は綿布生産の65%、絹製品の66%、食用植物油の89%を担っていたことを指摘している。『中国の社会』p119～121参照。外国製品がどれだけ中国国内に流通していたかについては、地域差もあるのでなお検討の余地があろうが、中国経済の不振をすべて外国製品の流入のせいにするのは難しそうである。
264. 原文は「你叫地方不穷吗」 反語である。必ず貧しくなると強調している。さらに続けて「还有什么数」と言って老人の分析を完全に否定している。
265. 原文は「忙到头」 王注：一年の最初から最後まで忙しく働くことである。
266. 原文は「东家」 王注：田を借りている地主のことである。
267. 原文は「就是这个话呀」 王注：主人公の言ったことに同意している。いとも自分自身、都会に住みたがっていることを認めている。
268. 原文は「过世界」 王注：「享受现代生活去」（都会的な生活を享受しに行く）ということである。
269. 原文は「小康人家一天天贫窘起来了」 王注：「小康人家」とは少しだけ土地を持っている地主と小規模の資本で商売を営み、やっつけけるにはやっつけけるが、たくさんの財産をもっていない。しかし、このレベルの家も一日一日「貧窘」となっていく。「貧」とはお金がなくなること、「窘」とは前ほど見栄が張れなくなるということであり、「貧窘」というところまで悪くはなっていない。
270. 原文は「那有多少钱买东西」 王注：ここでまた農村の荒廃の話題から商品経済の問題にもどる。
271. 原文は「朝奉」 もとは宋代の官職名であるが、のちに江蘇・浙江省一帯では質屋の番頭や店員を指すようになった。
272. 原文は「強盗土匪」 王注：「強盗」と「土匪」は少し異なる。「強盗」は場合によっては覆面をし、武器を持ち少数で行動するが、「土匪」は近代的な武器を携行し、人数も強盗に比べずっと多い。
273. 原文は「单单」 王注：「恰好」（ちょうどよく）という意味である。
274. 王注：老人は自分でも自説のつじつまをあわせることができなくなっている。「劫数」であるというならば、過去に外国人が中国からお金をだまし取っていった例を指摘しなければならないが、それができず、彼の反駁も弱くなってきている。
275. 原文は「闭关自守」 鎖国する。国を閉ざす。また家に閉じこもり、外との交流を絶つことを言う。
276. 原文は「自从打了败仗」 王注：1840年以後である。
277. 王注：いここは引き続き経済の観点から語り、以前の鎖国状態の方が中国はよかったと考えている。
278. 原文は「日本失业的又是多少百万」 1929年、ニューヨークの株式恐慌にはじまる世界恐慌のことを言っているのであろう。
279. 原文は「这不是中国外国都逃不了这个数」 王注：ここで老人が言いたいのは、やはり「劫数」からは誰も逃れられないということであり、「这不是」という否定の形で強調しようとしている。
280. 原文は「审问时的情形」 王注：自警団の尋問はたいそうあらつぽく、被疑者を罵ったり殴ったりして苦しめ苛んだ。これを主人公は面白いと感じていたというのだから、彼にはサディストの気質があるらしい。
281. 原文は「捉着五个变戏法的山东人，有两个女的，听说却会飞墙走壁」 「变戏法」とは手品をする、奇術をするという意味である。「飞墙走壁」とは武術の修練を積んだ人間が軽々と屋根を飛びこえ、垂直の塀を平地のように走ることを言う。王注：女性が二人いることを主人公は強調しているが、一般に人前で芸を見せる女性には美人が多いため、彼は興味を大いに示したのであろう。
282. 原文は「就地正法」 その場で処刑する。罪人を中央に送らず、逮捕した地で死刑に処すること。

清代の法律用語。

283. 原文は「发落」 処理する。処分する。判決を下す。
284. 原文は「薛家镇」 『涇県志』を調べたが、この地名は見あたらなかった。待考。
285. 原文は「团勇」 王注：「团勇」は自警団の構成員のうちで、武勇に秀でた者を指す。
286. 原文は「裤腰缝」 王注：当時の「裤子」は今のズボンと異なり、丈が長く腰のところで「腰带」をしめ、ずりおちないようにしていた。
287. 原文は「七星岭土匪给大凤山土匪的要函」 「七星岭」「大凤山」、いずれも『涇県志』に見つからず。待考。 王注：「要函」には、重要な手紙という意味と、簡略な手紙という意味と二つある。
288. 原文は「比前好过」 王注：顔つき、服装、そして態度が昔よりもよくなっていたのであろう。このあと、おじと主人公を見かけるやすぐに濡れ衣だと滔々と訴えるなど、以前と違い弁もたつようになっていると思われる。
289. 原文は「申辩」 申し開きをする。弁明する。釈明する。
290. 原文は「北河镇」 『涇県志』に見つからず。待考。
291. 原文は「小本买卖」 元手の小さな商売。小資本経営。また「小本生意」とも言う。
292. 王注：かつて北方中国では、夜寝るときに裸で寝ることが多かった。それゆえ、旅籠に泊まったときこのような事態が生ずることもあり得る。北方はシラミが比較的多かったので、冬など脱いだ衣服を門の外にかけておき、シラミを凍え死にさせていた。もちろん、現在はこのようなことはしていない（笑）。
293. 原文は「这种败类不办，地方上还不得」 「败类」には、ろくでなし、無頼漢という意味と、同類を害する者という意味がある。 王注：「办」とは、ここでは厳しく処罰するの意味である。「还不得」とは「不得了」（たいへんだ）、つまり「大乱」になるということである。
294. 原文は「吊起一双眼睛」 王注：京劇の「武生」（立ち回りを主とする男役）の隈取りがそうだが、目がつり上がっていると顔つきが恐ろしく見える。
295. 原文は「大凶手」 王注：普通、「凶手」は殺人の罪を犯したことのあつた者をいうが、ここでは凶悪な匪賊という意味で使われている。
296. 原文は「杀一儆百」 「懲一儆百」ともいう。一人を懲らしめて大勢への見せしめとすることである。「儆」は戒めるという意味である。
297. 原文は「河滩」 王注：処刑場に河原を選ぶことが多い。広くて見通しがいいため、見せしめにするのに都合がよいのと、簡単に血を洗い流してきれいに片づけることができるからである。
298. 原文は「大刀」 長柄のついた太刀。いわゆる青龍刀のこと。銃殺刑がおこなわれるようになる以前は、この大刀が使われていた。
299. 原文は「马刀」 王注：馬上で用いる彎刀。
300. 原文は「不由得不得抖颤」 王注：否定の否定である。「必得发抖」（必ず震える）ということである。ハゲの「大义凛然，视死如归」（大義のために深く死に臨む）という態度は主人公には死刑執行人よりも恐ろしく見えたのである。
301. 原文は「河滩上是挤满了人」 王注：ここから死刑執行の場面が描写される。この最初の一文は、たくさんの人が死刑を見物にやってきたことを物語っている。魯迅はかつて「薬」という作品の中で、死刑見物と関わりのある、中国人の特殊な趣味（死刑囚の血を饅頭につけて食べると肺病が治癒すると考えられていた）を書いている。作者もまた似たような場面をここで書いているわけだが、多少異なる点がある。魯迅は、刑死した革命家の血をつけた饅頭を食べようという人々の麻痺した感覚を強調して描いているのに対し、この作品では、ハゲを高く評価する人々が何人か描かれている。これはおそらく 20 年代、30 年代の中国の農村に、魯迅の作品が書かれた辛亥革命の時期に比べて進歩的なあるいは新しい思想の持ち主が増えてきたゆえんであろう。
302. 原文は「小秃子押到河滩上，大叔叫那刽子手用足踢倒他」 王注：中国では死刑（特に刀で首切る死刑）を執行するときに必ずおこなうことである。普通、蹴りたおして地面にひざまずかせるが、これは首を切るのに都合がよいからである。
303. 原文は「可是刽子手踢不好」 王注：首切り役人は肝っ玉がちぢみあがってしまい、うまく蹴倒せなかったのである。
304. 原文は「到死不降气」 王注：「降」はjiàng とともxiáng ととも読める。jiàng と読んで「不降自己的人格、尊严、气质」（自分のプライドを保つ）と解釈することも可能だが、この場合は死をもお

それない、屈服しないという意味でxiángに読む方がよいであろう。

305. 原文は「还故意把头颈贴在一大块大石上」 王注：ハゲは、「故意」に自分の首を大きな石にくっつけたのであり、これは彼に勇気があることの証である。石を台にして首を切りやすくし、「切れるものなら切ってみろ」という「視死如归」の気概を示したのである。譚嗣同という清末の政治家も死刑になるとき、他の囚人たちがおびえている中で彼はハゲと同じようにしたと伝えられている。
306. 原文は「扶也扶不起来」 王注：ガンとして体を起こそうとせず、首を切られて死のうとしたのである。
307. 原文は「双手把住刀柄」 王注：この時点で首切り役はもはや片手で刀を持つこともできなくなっていた。それで両手で刀を握りしめたのである。
308. 原文は「不住地抖，没法砍得下去」 王注：死ぬ間際の人間に見つめられるとあの世で復讐されるということが一般に信じられており、死刑囚が顔を下に向けているのなら切りやすいが、この場合、ハゲは首を石につけ首切り役を横目でにらむ形になっていたため、彼としては復讐されるのが恐ろしく刀を振り下ろせないでいた。
309. 原文は「臭骂」 王注：「很凶地骂」（激しく罵った）という意味である。
310. 原文は「象砍柴尸似地」 王注：まるで薪を割るようにむやみやたらに切ったということである。
311. 原文は「把马刀口砍成狗牙齿」 王注：首切り役は一太刀で首を切り落とせず、おそらく何回か石を切ってしまった結果、刃が欠けて犬の歯のようにぎざぎざになってしまったのであろう。
312. 原文は「只有几个野孩子拍手嚷」 王注：「野孩子」とは、汚くて道理を知らぬ子供のことである。
313. 原文は「僵卧不动」 「僵」は硬直すること、「卧」は横になることである。ちなみに「キョンシー」の原義は「僵尸」（硬直した死体）である。
314. 原文は「刽子手也被其他团勇扶着走了」 王注：首切り役もショックで足腰がたたなくなっていたのである。
315. 原文は「忽然那尸首又挣扎起来」 王注：「尸首」は死体のこと。「挣扎」はもがく、あがくの意で、ここではもがいて体を上に起こそうとしただけであり、立ち上がったわけではない。
316. 原文は「象个恶鬼凶神似的放着尖嗓子叫嚷」 王注：「恶鬼」とは恐ろしいたたりをなす靈魂のことである。「鬼」は中国では靈魂を言う。中国の神様は必ずしもみなきれいな顔をしているわけではなく、たとえば中国の家の扉には悪霊の侵入を防ぐため門神の絵を貼る習俗があるが、この神様（門神）は目をかっと思開き、口が裂けた恐い顔をしている。「凶神」とはこのような神である。首は切りおとされていないので、まもなく息絶えようとするときに、言葉にならない甲高い声を発したのであろう。
317. 原文は「大家都吓得向远处逃避」 王注：死にかかった人間ににらまれるのが恐ろしくてみんなあわてて逃げたのである。
318. 原文は「口白面青」 顔面蒼白で血の気がない様子。「面青唇白」とも言う。
319. 原文は「我们连跌了几个我们连跌了几个踉跄」 王注：まるで転んだみたい（実際には転んだわけではない）足元がおぼつかず、逃げていくさまを述べている。
320. 原文は「只有几个胆大的庄稼人走拢撮弄」 「庄稼人」とは農民のこと、「拢」は近づくという意味である。 王注：「撮弄」は「收拾」（片づける）という意味である。
321. 原文は「我是吓傻了，紧紧拉着大叔的手不放」 王注：この一段ではハゲの勇敢さと、見物人、首切り役、主人公、おじたちの恐れる様子を描き対比させている。
322. 原文は「你们可想得起这人去做土匪」 王注：以下で死刑を見ていた人たちの評価がなされている。「可」は「怎么能」の意味であり、「想得起」は「看得出」（みなす、見て取れる）の意味である。言わんとするところは、「どうしてこの人間が土匪（盗賊）をやっていたという風に考えられるのか？そういう風にはとても見えない。彼は土匪や役人なんかじゃないよ」ということである。こう言った人物はハゲを非常に高く評価している。
323. 原文は「怕是个星宿转劫呢，看他那气概，也算得是条好汉了」 王注：中国では地上の英雄と天上の星宿とが結びついていると考えられている。「气概」とは、ここでは死に臨んでも恐れぬハゲの様子をいう。「好汉」は傑出した英雄のことである。これもハゲに対する高い評価である。 按：「转劫」については、『漢語大詞典』は「犹转世」とし、呉組紺『山洪』から例文を取っている。星と英雄の関わりについては、『水滸伝』や『西遊記』などの小説にも多く書かれている。星の生まれ変わりである英雄（「劍神」）が劍を手に入れて活躍し、最後には最後には劍を失って死を迎え、

再び天に帰っていくという物語は、中国の通俗小説や民間説話などに枚挙に遑がないほど見られる。

324. 原文は「一路上都七嘴八舌的谈这事」 大勢ががやがやしゃべるさま。「七张八嘴」とも言う。
325. 原文は「大叔只是骂刽子手和团勇，说他们都些脓包，但后来打趣说」 「脓包」はここでは役立たず、能なしの意味である。「打趣」は揶揄する、冷やかすという意味である。 王注：ここでなぜおじだけが彼らを罵っていたのかというと、前のところで人々がハゲについてなかなか高い評価を与えていたからである。死刑にされた人がいい人だとすると死刑を執行した人は悪いことになる。みんなの見方は叔父さんに対して不利であり、だからそれをうち消すために懸命に罵ったのである。ハゲを首切り役人が一太刀で殺していれば、死体がもがくこともなく、みんながハゲを英雄と思いこむこともなかったであろう。
326. 王注：おじの彼に対する評価は他の人々とは正反対である。
327. 原文は「奶婆张大嘴巴象发狂似的直着嗓子嚷」 王注：「一直嚷」（ずっと叫び続けた）のである。
328. 原文は「黑天大冤枉！黑天冤枉！」 王注：この「黒天大冤枉」は非常に重要な言葉である。「黒天」は黒い雲が空いっぱい広がっているさまをあらわす。「冤枉」は、自分がやったことでもないのに、罪を無理矢理他の人から転嫁されることである。ならば、「黒天大冤枉が」とは「铺天盖地」（天地を覆い隠すような）全く濡れ衣ということになる。彼女は、自分の夫が匪賊でもないのに無実の罪を着せられて処刑されたのであり、彼はよい人間だと訴えているのである。
329. 原文は「嚷着就往河滩上蹦蹦跚跚地奔。许多孩子妇人跟在后面看」 王注：「蹦蹦跚跚」は腰を振りながらふらふらと歩くさまである。足取りが不確かであっちに行ったりこっちに行ったりしているが、「奔」という動詞が用いられているので、急いで前に進もうという気持ちが本人にはある。
330. 原文は「人丛里钻出铁芭蕉嫂子」 王注：「钻」は鉄芭蕉の動作が非常にすばやい様子をあらわしており、乳母の「蹦蹦跚跚」と対比されている。
331. 原文は「你这婆娘才叫尿迷了心窍」 「迷心窍」とは分別をつかなくする、人の心を迷わせるという意味である。「迷其心窍」とも言う。 王注：「脏东西迷乱了你的心窍」（汚いものがおまえの心を迷わせている）という意味である。
332. 原文は「零肉细刷」 中国に昔あった酷刑。「刷」とは体をいくつにも刻み、なぶり殺しにすること、いわゆる「凌遲」のことである。
333. 原文は「造化了他」 按：「造化」は運がいい、幸運に恵まれるという意味である。
334. 原文は「却碰着五通神似的哭你娘的什么丧！你……」 王注：「五通神」は、恐ろしい神様のことである。 按：民間信仰の神。『七修類稿』に「謂五通神即五聖」とあり、『陔餘叢考』に「謂五聖、五顯、五通名雖異，而實則同」とあり、また『重修臺灣縣志』卷六に引かれる『蘇州志』は「五顯乃婺源土神」と述べていることからすると、五通神には複数の呼称があり、もとは江西婺源のローカルな神様だったようである。
335. 王注：おそらくこのあとにもっと聞くに耐えない言葉が続いたと想像される。このように突然終わる締めくくり方を中国では「豹尾」と呼ぶ。中国の小説の書き方として「虎頭」（出だしは非常に勢いがある）、「猪肚」（真ん中は大きくて内容が豊富）、「豹尾」（あっさりと終わる）というのが一つの理想とされている。

【参考文献】

- 星斌夫編『中國社會經濟史語彙 正篇;續篇』（光文堂書店 1981）
- 岡本隆三『纏足物語』（東方書店 1986）
- 増井経夫『中国の銀と商人』（研文出版 1989）
- 内山完造『中国人の生活風景』（東方書店 1979）
- 森時彦『五四時期の民族紡績業』（同朋舎 1983）
- NHKドキュメント昭和取材班編『上海共同租界』（角川書店 1986）
- 丸山昇他編『中国近現代文学事典』（東京堂出版 1991）
- 高橋孝助・古厩忠夫編『上海史』（東方書店 1995）
- 西澤治彦他編『中国』（河出書房新社 1995）
- 村松伸・増田彰久『図説上海 モダン都市の150年』（河出書房新社 1998）

- 木之内誠編著『上海歴史ガイドマップ』（大修館書店 1999）
 アリス・ホバート著／麻上俊夫訳『支那ランプの石油』（三笠書房 1938）
 ロイド・E. イーストマン著／上田信・深尾葉子訳『中国の社会』（平凡社 1994）
 フィル・ビリングズリー著／山田潤訳『匪賊』（筑摩書房 1994）
 嚴中平『中国棉業之發展』（商務印書館 1943）
 嚴中平『中国棉紡織史稿』（科学出版社 1963）
 唐沅『吳組綑作品欣賞』（広西人民出版社 1986）
 ※唐沅「吸血者の自供状—読『官官的補品』／唐沅編「吳組綑年表」を収録する。
 章有義『近代徽州祖佃関係案例研究』（中国社会科学出版社 1988）
 翁飛等著『安徽近代史』（安徽人民出版社 1990）
 忻平『從上海發現歷史—現代化進程中的上海人及其社会生活（1927-1937）』（上海人民出版社 1996）
 王永寛著／尾鷲卓彦訳『酷刑—血と戦慄の中国刑罰史』（徳間書店 1997）
 夏曉虹著／清水賢一郎、星野幸代訳『纏足をほどいた女たち』（朝日新聞社 1998）
 『涇縣志』三十二卷首一卷附『涇縣統志』九卷（民国三年用嘉慶十一年本景印統志用道光五年本 東京
 大学東洋文化研究所蔵）
 『文林聚宝万卷星羅』四十卷（明万曆二十八年書林詹茂齋詹懋齋刊本 蓬左文庫蔵）